リヨン風信(四十五)

『撮影日和』

中川莉羅

『秋』六十周年記念おめでとうございます。祝賀会にお誘いいただいていたにも関わらず、遠方のため参加できず、このような形で祝意を表することをお許しください。皆様のお写真を拝見して、祝賀会の楽しそうな様子を思い浮かべておりました。『秋』誌の今後の益々のご発展をお祈り申し上げます。

ひところは天窓から曇り空ばかり見えていたのだが、最近は暑さがぶり返してきたようだ。日中は二十度を超える陽気で、外を歩いていると軽く汗ばむ。十月のフランスにしては例外的な気候だ。かっきりと青く晴れ渡った空に羊雲が浮かんでいる。そこに飛行機雲がまっすぐな線を描いて飛んでゆく。

十月の散歩は秋色を探すのに夢中になる。赤く色づいた蔦の葉、可憐な桃色のアネモネ。オリーブ色のどんぐりの実が少しずつ茶色くなりはじめ、すすきの穂がさやさやと揺れる。マルシェに行けば、童話にでも出てきそうなころんと丸いかぼちゃの鮮やかなオレンジ、みずみずしい茄子の紫が目に飛び込んでくる。

次々と現れるこれらの色をカメラに収めようとするけれど、失敗ばかりでうまく撮れない。自慢ではないが、私は写真やビデオ撮影といったものが昔から苦手なのだ。たとえば、旅行中に撮影した海や砂浜がピンボケの写真に収められていたり、街の風景を撮っているつもりがカメラが反転して自分のマヌケ面を延々と映している、といったことが多発す

る。フランスの生活を紹介するビデオを作ろうとしている者にしては、あるまじき失態である。

見かねたアランが、ある日スタビライザーをプレゼントしてくれた。スタビライザーとは、携帯電話で街の風景などを撮影する際に手ブレを防止する器具のことで、これがあるのとないのとでは映像の仕上がりがまったく違うという。何度もお礼をいう私に、「ちょっと早めの誕生日プレゼントだよ」と彼は言う。

「もうこれで、ビデオ撮影が下手だなんて言い訳できなくなっちゃったね」と私。

「そうだよ。たくさん練習して、いいビデオを作らないと許さないからな」と言ってアランは笑う。

ちょうど彼も、以前日本で購入したというキャノンのカメラを試したくてうずうずしているようだったので、教会で写真撮影の練習をすることになった。

タラールには教会が三堂ある。ひとつはアパートのすぐ裏にあるサント・マドレーヌ教会で、部屋の中にいても鐘の音が聞こえてくるほど近くにあり、散歩のついでにいつも立ち寄るお気に入りの場所だ。もうひとつは丘の上にあるシャペル・ベル・エール。こちらは急な坂道を延々と登らないと辿り着けないのでそうそう気楽に行くことは出来ないが、十七世紀の建立以来、地元の人々に愛されている教会である。そしてもうひとつはサン・アンドレ教会。坂道の上にひっそりと建てられたちいさな教会で、一見するとふつうの建物なのだが、よく見ると側面は灰褐色の石造りの壁で、正面は黄土色の煉瓦で出来ている。十八世紀に建てられた古典的な教会と、十九世紀末に建てられたネオ・ゴシック様式の教会という、二つの建物を統合したものらしい。

足を踏み入れると、ステンドグラスのまぶしい光と共に素朴な木彫りの聖母マリア像が迎え入れてくれる。祭壇の両脇には、百合の花を基調にした美しい壁を背に聖人像が佇んでいる。ぐるりと歩いていくと、ジャンヌダルク像と目が合う。当時ほんの十六歳ほどだった少女がフラ

ンスを救う使命を担って遠征の旅に出たというのは、よく考えるとすごいことだと思う。彼女は一体どのような気持ちでいたのだろう。あれこれ夢想に耽りながら早速撮影を開始する。するとアランが小声で私に注意を促した。

「だめだよ、そんなむやみにカメラを振り回したら。君は、画角というものを考えたことがある？」

「ガカク？」と私。アランは苦笑いしている。

「僕はプロのカメラマンじゃないけど、これでもイラストレーターのはしくれだからね。絵の構成だとか、そういうことに関しては目が肥えているつもりだ。ほら、そもそも君は対象物の真正面に立ってないでしょう。それから、歩きながら撮影するとき、目線が地面に近づきすぎている。床や椅子なんて撮ったって、観ている人にとっては面白くもなんともないからね。それに、フレームが全然なっていない。たとえばこのジャンヌダルク像を撮るとしたら、君の映像には

上部の余白

がなくて、像が途中でちょん切れているでしょう。左右の余白も均等じゃない。」

言われてみれば確かにその通りだった。正直に言うと、アランに指摘されるまで、それらのことを意識したことさえなかった。ただカメラを撮りたいものに向かって適当に向け、適当にシャッターを押せば写真（もしくはビデオ）が撮れるものだと思っていた。確かに、その方法でも物理的には何かしらの画像は撮れる。だが往々にしてそれは美しいものではない。たとえば人生の大切な思い出の写真でさえ、「なんとなくシャッターを押しました」といった感じのピンボケの写真で残るとしたら、それはやはり悲しいことだ。もう、あの

日あの場所に戻ってあの風景を撮り直すことはできないからだ。

「カメラレンズは心の目だ」という表現があるけれど、その言葉を借りるなら、私の目は彩度六十％の曇りレンズみたいだと思う。ガラス玉のような目玉を開きっぱなしにして、いつもなんとなくその場に佇んでいる。自分の本当に見たいものにピントを合わせられず、何を伝えたいのかもわからない。大げさなようだが、ぼんやりと生きてきた自分の人生の縮図を見たようで、私はちょっぴりショックを受けた。

「ちょっと厳しく言い過ぎたかな？でもね、僕は君ならできるって確信してるんだ。素敵なビデオを作ってね」

アランはそういって私の肩を叩いた。

教会の外に出ると、すっかり高くなった陽が通りを照らしていた。石壁の中の空気はひやりとしていて、思ったよりも躰が冷えていたようだ。あたたかい光が肌を溶かすのを感じる。

「さあ、家に帰ったら映像をチェックして、それから夜はテレビシリーズを観よう」

とアランが言った。私はうなずき、いつもの道を歩き出した。

◆リヨン風信（四十四）

コルシカ島・南仏旅行記（後半）

中川莉羅

朝九時ころ起き、シャワーを浴びて庭で朝食をとる。昼はみな居間に集まり、『名探偵ポワロ』の再放送などを観る。昼寝をした後、川遊びや海に行く。アランの幼少期の記憶を辿ってビーチ探索をすることもあった。コルシカ島には、山も海も川もみんなあって、すべてをいっぺんに見たいので目がぐるぐると忙しい。

夜になると、私たちは星の見えるテラスでアペリティフをとった。星空を眺めていると、人は寡黙になるものだと思う。まるで星々の輝きをさえぎらないようにと息をひそめているみたいに。時折、誰かが冗談を言って馬鹿笑いをした。真面目な話をすることもあった。あるいはまた音楽を聴いたりもした。私たちの頭上を蝙蝠がすごい速さで飛んでいった。

アランはいつのまにか松葉杖なしでも歩けるようになり、強度の食物アレルギーを持つグザビエも、チーズやソーセージを口にするようになった。私は仕事も将来の不安も忘れ、ただ静かに息をしている自分の躰と心を感じていた。コルシカ島には聖なる霊気が宿っていると誰かが言ったとしても、私は大真面目に頷くと思う。そのようにして日々は過ぎていった。

週末、アランとグザビエの大叔母たちの家を訪ねた。ルシアとセシリアという名のその姉妹は二人で暮らしており、九十歳を越えているのになお畑仕事をしているという。夕方訪ねていくと、先客がいた。それはジャン・フランソワといって、アランの母君の

従兄弟にあたる人物だという。長身で溌剌とした人物で、肌はきれいに日焼けしている。アランとグザビエに会うのは二十数年ぶりだそうで、二人に会えたことを心から喜んでいるようだった。

続いて舞台セットのような美しい居間に通された。久々の再会なのだから、家族のことや近況報告などに話題が落ち着くだろうと思っていたが、その予想は大きく外れた。熱心なクリスチャンであるジャン・フランソワは、宗教談義を始めたのである。講演会でも開きそうな勢いでとうとうと語られるその内容は、正統的な教義とは言い難かったが、それでも、彼の二元論的な物の見方は非常に面白かった。二時間ほどほぼノンストップで彼の話が続いた後、そろそろお開きにしようということになった。帰り際、大叔母様たちは家の庭で採れたトマトを持たせてくれた。それはずしり

と重く、鮮やかに熟しており、スーパーマーケットで見かけるトマトの三倍ほどもありそうな大きさだった。

「膝が痛いのでだらしない恰好で申し訳ないけど、あなたたちが来てくれて嬉しかったわ」と別れ際にルシアが言い、「またおいで」とセシリアが言った。年を重ねても、躰の調子が芳しくなくても、人を愛し、何かを与えようとしている。人間はそのように生きてゆくこともできるのだと思うと、躰の芯がきゅっと引き上げられるような気がした。

いよいよコルシカ島を離れる日が来た。しかし私たちの旅はこれで終わりではない。リヨンに戻る前に、南仏のイエールで途中下車して彼らの親戚に会うことになったのだ。イル・ルース(île Rousse：「赤い島」の意)から船に乗り、八時間ほど揺られる。翌朝九時前に南仏のトゥーロンに到着した。そこからイエールまでは車で三十分もかからない。到着するとすぐ、グザビエの母親のジュリエットが出迎えてくれた。小柄な躰に淡褐色の短い髪の毛、少女のような微笑を浮かべている。そこへ、ジュリエットの姉のマリアンヌとその伴侶のミシェル、さらにアランの伯父のパスカルも加わり、場はあっという間ににぎやかになった。昼食までまだ時間があるからプールに行くといいとミシェルが言い、私たちは子どものように駆け出していった。

プールというのは、そのアパートの設備に含まれているプライベートな空間で、住民の社交場と化しているようだった。水の中に入るのは気恥ずかしいが、ひとたび飛び込んでしまえば天国である。真夏の陽射しで疲れた肌が水をぐんぐん吸収するのを感じる。私はそうして水の中でのびのびと手足を動かしながら、ジュリエットとグザビエを観察していた。この親子は遠くから見ると年の離れた姉弟のように見える。この家族の人々には何か特別な遺伝子でもあるのだろうかと思うほど、みな若々しい。そして潔癖症と言えるほど綺麗好きである。

ひとしきり泳いだ後、昼食に招いていただいた。お手製のラタトゥイユやフムス(ひよこ豆をペースト状にした料理)、そして私たちがお土産に持っていったチーズやワインなどをいただきながら、おしゃべりし、またプールに戻って泳いで、気が付いたらあっという間に夕方だった。

さて、そこからさらに、今度は彼らのもう一人の従兄弟のトマの家へ移動する。トマと、その伴侶のディアナが招いてくれたのは少し奥まった場所にある山小屋だった。元々はトマの父親のものだったというが、改良して夏の別荘として使っているとのことだった。先ほどのメンバーに加えて、十五

歳になったばかりの彼らの娘さんのクロエ、その友人のエマ、それから三歳の娘さんのガブリエルも加わり、再びアペリティフが始まった。クロエとエマは、メイクアップをしっかりして、爪を綺麗に塗っている。十五歳とは思えないほどの大人っぽさだねと言うと、彼女たちは少し恥ずかしそうな、誇らしそうな顔をした。

パーティーの中盤で、少女たちは音楽を流し始めた。今、流行中のアラビア語のラップである。

「ひどい音楽を聴いてるなぁ。もっと趣味のいい音楽が他にもあるでしょう」とアラン。

「何言ってんのよ、これが今最高にクールな音楽なんだってば」とクロエが言い、エマも同意する。そして彼女たちはアランの周りを取り囲んで踊り始めた。

「あー、いやだいやだ、聴きたくない」と耳を塞ぐアランをからかうように、少女たちの踊りは加速していく。自分たちが若かったころは、『大人は何もわかっていない』と言い、大人になった今となっては『若者は何も知らない』とこぼす。これは世代を問わず、結局いつの世も同じことの繰り返しなのかもしれない。

その晩、私たちはご夫婦のご厚意で、テントに寝かせていただくことになった。エマやクロエも、少し離れた場所にテントを用意している。テントで眠るなんて、何十年ぶりのことだろう。小学生の時の林間学校以来かもしれない。

「野生の地へようこそ」とグザビエが言い、私たちはくすくす笑った。何せ深夜の船旅でろくに眠れなかった上に、休む間もなくプールだのパーティーだのと遊びまわっていた私たちは泥のように眠った…と言いたいところだが、実際はそうでもなかった。蒸し暑い空気と蚊の襲撃により、眠りはしょっちゅう妨げられた。おまけに耳栓を突き破る勢いのアランのいびきが一晩中聞こえている。翌朝、寝ぼけまなこでぼんやり起きると、少女たちはテントをたたんでとっくに部屋に戻っていた。

午後もアペリティフが続き、またひとしきり話した後、今度こそいよいよ別れを告げる時が来た。

「楽しかったよ、ありがとう」だけでは感謝の言葉を言い足りない気がした。けれど彼らは南仏の空気のようなからっとした笑顔でこう言うのだ。「こちらこそ。またね」と。そう言われると、その「またね」はまた風に乗ってふとやってき

◆リヨン風信（四十三）◆

コルシカ島・南仏旅行記（前半）

中川莉羅

八月はバカンスのシーズンである。この季節は、街中が麻痺したかのように静まり返る。レストランやブティックには「夏季休暇中」の貼り紙がされ、通りにはまばらな人影しか見えない。「フランス人はバカンスのために働く」とよく言われるが、これは偏見ではなく事実だと思う。

ここ数年はしかし、コロナウイルスの問題があったので、アランと私はどこにも出かけずに夏を過ごしていた。ところが今年の三月十四日より規制が緩和され、国民たちの行動範囲は大幅に広がった。彼のいとこのグザビエがコルシカ島に行くというので、ではいっそのこと三人で出かけようということで話がまとまった。

コルシカ島は地中海西部、イタリア半島の西に位置するフランス領の島である。面積は約八六〇〇平方キロメートルで、日本の広島県と同程度の大きさである。ターコイズブルーの海にそそり立つ乳白色の断崖、山肌にしがみつくように広がる石造りの村々、栗の木が植えられた峡谷。一方、フランス皇帝ナポレオン一世の出身地としても知られており、歴史と伝統が色濃く残る場所でもある。

そもそもなぜコルシカ島に旅行に行くことになったのかというと、彼らのルーツを遡るとコルシカ島に辿り着くそうで、子どものころにはよく遊びに行っていたそうだ。

私たちは胸をときめかせて早くも六月ごろから旅行の準備を進めていた。

ところが、である。七月中旬になって、アランの体調に異変が起こった。夜中に起き出し、右足首が痛いと言う。はじめは捻挫かと思われたが、やがてそれは激痛へと変わっていった。踵を床につけることもできなくなり、トイレに行くにも這っていく有り様である。一体この痛みは何なのか。緊急病院で診てもらったものの、医者にも原因はわからないと言う。レントゲン検査の結果、骨折の恐れはないとのことで、おそらく捻挫か通風のいずれかだろうということになった。痛み止めの飲み薬と、患部を氷で冷やす対処療法を続けること二週間。痛みは波のように繰り返し訪れるらしく、これでは奇跡でも起きない限り旅行は無理だねと話し合った。そして、グザビエだけでも一人で行ってもらおうと。

出発前日、グザビエに別荘の鍵を渡すため、タラールまで車で来てもらった。なんだかお通夜のような雰囲気の中、もそもそと夕飯を食べた。アランの痛みがひどく、夜中にうめき声を上げるので、私は本気で神に祈った。ああ、もう旅行などどうでもいい。彼の苦痛を取り除いてください。どうか彼を救ってくださいと。

そして奇跡が起こった。翌朝、アランはけろりと起き、痛みが去ったという。もちろん全快ではないが、松葉杖を使えばなんとか歩けそうだと。ではということで、慌てて旅行の準備をし、いざ出発となった。

朝九時頃タラールを出発し、南仏のトゥーロンまで車を飛ばす。途中休憩と渋滞も含め七時間ほどかかる。そこからさらにコルシカ島行きの船に乗り換える。真夜中近くになってやっと出航した。船が港を離れる。淡い光に照らされた街がぐんぐん遠ざかる。闇の中で踊る波が獰猛な虎の牙のようにも、無邪気な鴎のダンスのようにも見え、私は魅了された。

ロマンティックな船旅を期待していた私の期待はしかし、少なからず裏切られることになる。プライベートの有料寝室は予約制となっており、金銭的に余裕のないほとんどの客たちは床に雑魚寝するしかない。煌々と光の灯ったままの廊下に襤褸雑巾のような躰を横たえ、私たちはなんとか眠りについた。

朝八時頃、船はいよいよコルシカ島に到着した。アランは目を輝かせて子どものようにはしゃいでいる。かわいそうに、相変わらず松葉杖をついたままではあるが、なんとか船を降り、さらに車に乗り換えて別荘へと向かう。

別荘はコルシカ島北部の山奥にあり、うねうねと続く細い坂道を延々と車で登らなければならない。しかし沈着冷静なグザビエの運転と、車内に流れる心地よい音楽、それに窓か

ら吹き込んでくる清々しい風のおかげで旅の疲れも少しずつ癒されてきた(ミュージシャンであるグザビエの選曲センスは抜群だ)。眼前に迫って来る剝き出しの岩肌、視界の端に流れるように現れては消える松の樹々。時折、道端で草を食む牛や豚の親子に出くわした。コルシカ島では、動物が堂々と道路を横切るので人間のほうが恐縮すると聞いていたが、噂は本当であった。

一時間ほど車に揺られていると、別荘に到着した。家の中はきちんと整えられ、古いが上等な家具がしつらえられている。庭には蜜柑やいちじくの木が植えられており、驢馬と馬が出迎えてくれた。元々は彼らの大伯母の家だったそうだが、アランの妹さんご夫婦が買い取り、今では別荘として使っているとのことだった。この家はきっと代々丁寧に守られてきたのだろう。

夕方になると私たちは庭でアペリティフの時間を過ごした。到着した日は日曜日で、唯一開いていた現地のスーパーマーケットであわてて買い物をしたものだから、夕食と言えるものはトマトぐらいしかなかった。するとグザビエが、オリーブオイルとバジル、それに塩胡椒をかけてごらんと言う。幸い、調味料は戸棚に用意されてあったので言われたままにしてみると、ただのトマトがうんと豪華なサラダに変身した。このように、野菜ひとつでさえ美味しく楽しく食べるというのがフランス人のエスプリなのだと改めて思った。

フランスの夏は長い。夜九時半ごろになってようやく陽が沈む。夜が更けるまで、気の向くままに私たちは語り合った。コルシカ島は彼らの先祖が代々住んできた土地なので、話題は自然と家族のことに流れた。相互依存という絆は断ち切れない、たとえ仏陀でも完全なる自立など不可能なのだ、人間はいつだってこの世界に助けられて生きているのだからと、なんだか真面目な話をしていると、突然グザビエがシャボン玉を吹き始めた。

「今、真剣に話してたのに、なんだよ！」とアラン。

「いや、なんとなく。前からやってみたかったんだよ」とグザビエは肩をすくめる。

「大の大人がシャボン玉なんて恥ずかしいだろ？一人じゃなかなか出来なかったんだけど、今はバカンス中だからね。これくらい許されるだろ？」

「あはは、そりゃいいね。リヨンに帰ってからも続けろよ。仕事の面接とか、そういうストレスフルな場面でさ、シャボン玉をプーっと吹くんだ。そしたらみんなこう言うさ、『出た、森のトロールだ』ってね」

とアランが言い、私たちは大いに笑った(トロールとは北欧の国の伝承に登場する妖精の一種。毛むくじゃらの粗暴な大男として描かれる)。

太陽が完全に沈んでしまうと、私たちは灯りを消して、しばらく星を眺めた。標高約八五〇メートルの山の上。裸の星の光が、プラネタリウムのように明瞭に見える。時折、コウモリが飛んでいるのが見えた。私は生まれて初めて流れ星を肉眼で見た。

「さあ、莉羅、願い事をするんだ。ロトで百億円当たりますようにって言うんだよ」とアランが言い、私たちはまた笑った。

アランの怪我が治りますように、グザビエの音楽活動がうまくいきますように、そしてこのまま素敵なバカンスを過ごせますようにと、私はひそかに祈った。

◆リヨン風信(四十二)◆

『再会』

中川莉羅

七月八日、安倍晋三元首相が銃撃されたニュースは、フランスでも大きな話題を呼んだ。銃撃事件などとは縁遠いように見える平和な国での出来事ということもあり、日本国民のみならず、世界中の人々に衝撃を与えた事件であった。フランス国民にとっては、この事件が七月十四日の革命記念日の直前に発生したということも大きなポイントであるようだ。というのも、ちょうど二十年前の革命記念日、パリで当時のシラク大統領への狙撃未遂事件が発生したためだ。幸い、銃弾は外れ、狙撃犯はその場で取り押さえられたため大事には

至らなかった。日本では残念ながら平和的解決には至らなかった。安倍元首相の逝去が無念でならない。

こうした惨劇にも関わらず、私たちの日常生活は続いている。場違いなほどのんきな音楽の中で回り続ける回転木馬のように。

先日、韓国人の友人とリヨンで会うことになった。アランは「楽しんでおいで」と送り出してくれた。リヨン行きといえば、いつも必ずアランやグザビエと行動を共にしていたので、今回のような一人旅は本当に久しぶりである。リヨン行きのバスに乗り、地下鉄に乗り換え、旧市街地を目指す。待ち合わせ時刻よりもずいぶん早く着いてしまったので、大聖堂前のカフェテラスで彼女を待つことにした。

彼女とは、三年ほど前にリヨンの語学学校で知り合った。年齢も国籍もバラバラな生徒たちが十四、五人ほど集まって出来たそのクラスの中で、彼女はなんとなく心細そうに見えた。華奢な躰。Tシャツから突き出た細い腕。つるりとした顔にかかる真っ黒な長い髪。野うさぎのような瞳。当時、彼女は十九歳だと自己紹介したように記憶しているが、全体的にどこかあどけない雰囲気があり、十四、五歳の少女のように見えた。聞けば韓国の高校を卒業してからすぐにフランス留学を決めたとのことなので、いずれにせよ彼女はそのクラスの中で最年少だった。

少し内気だけれど、真面目で何事にも一生懸命な彼女に私は好感を抱いた。私たちは気が合って、よく行動を共にするようになった。授業の課題でグループワークをする時も、帰宅する時も、いつも彼女と一緒だった。彼女は三人姉妹の末っ子である。年子の姉と、三歳年上でバレリーナの姉がいる。その年子の方のお姉さんもリヨンに留学していたので、姉妹そろって通学してくるところをよく見かけた。彼女たちは双子のようにそっくりで、遠くから見るとどちらがどちらだか見分けがつかないくらいだった。

そのようにして一年が過ぎた。彼女と年子の姉は家庭の事情で一時帰国をすることになった。そしてまた改めてフランスに戻り、大学に入りたいと彼女は語っていた。その後、コロナ騒動のせいで大学入学準備は思うように進まなかったらしい。それがやっと念願かなってフランスに来られるようになったと連絡があったのが、今年の六月頃だった。

久々に会う彼女は、以前とまったく変わっていないように見えた。ハグをしたらうっかりして背骨を折ってしまうのではないかと思うほど、細い躰。首をかしげてこちらを見上げる時の黒い瞳。化粧っ気はほとんどなく、赤いリップを塗った唇だけが夏の庭に置き去りにされたさくらんぼのように光っていた。

私たちは観光客で混み合う旧市街地をぶらぶら散歩した後、木陰のカフェテラスに入ってアイスコーヒーを注文した。入学祝いにと持っていったサーモマグを渡すととても喜んでくれた。昨日まで語学学校で顔を合わせていたみたいに、空気はよどみなく流れた。彼女はまず語学学校で夏期講座を受け、その後リヨン大学の商業学科に進むのだと言った。さらに博士課程までこちらの大学院で勉強するか、あるいは韓国に帰るのかはまだ決めていないという。いずれにせよ、彼女の前途は七月の海のようにきらめいているように思われた。一方、私はといえばリヨンからタラールに引っ越したこと、大学進学を途中で断念したこと、そして自分で立ち上げたオンラインスクールを発展させていくことなどを語った。このように話すとなんだか怒濤の展開のようだが、実際にはこれらの出来事はゆっくり、ゆっくりと時間をかけてやってきたのだった。まるで川の流れが小石を押し流し、地底を削り、それ自体の進む道を自ら決めていくように。

コーヒーを飲み終わってしまうと、夏の明るい陽射しに背を向けて早々に立ち去るには惜しいような気がした。そこで私たちはカフェテラスを出て、また街をぶらぶらした。色とりどりの看板を掲げるレストランや、ミニチュア博物館、大聖堂の前でパフォーマンスを繰り広げる大道芸人。それらの景色が次から次へ

と現れてはシャボン玉のように踊りながら去ってゆく。私は奇妙なデジャヴを感じていた。リヨンから離れて一年八か月ほど過ぎたけれど、旧市街地の街並みはそっくりそのままあざやかに残っている。まるでオルゴール箱に閉じ込められた架空の街みたいに思えた。目を閉じたら、この街はぴたりと動かなくなってしまうのではないかというような気がした。

彼女は石鹸の専門店でアルミ製の小箱と香り付きのアルメニア紙を買ってプレゼントしてくれた。小箱には《Week-end à la mer》（海での週末）の文字と、ビーチを背景にしたピンク色の車が描かれている。入学祝のお礼だと言う。そういった律義さがいかにも彼女らしいと思ったので、ありがたく頂くことにした。私は同じ店でラベンダーの石鹸とポプリの袋、そして

別の店でサバの缶詰セットをアランのお土産に買った。まだリヨンに住んでいたころ、旧市街地を散歩するたびにアランはたくさんのプレゼントを買ってくれたので、そのお礼のつもりだった。その当時の私はアパートの家賃と学費を払うのに汲々としていて、食費さえ出し渋るような日々だった。情けないことだが、私の方からはプレゼントなどおろか、コーヒーをおごってあげることさえ出来なかった。けれど、こうして目の前にいる年下の友人と向かい合っていると、「誰かのために何かをしてあげたい」という歓びも確かに存在するのだなと思った。入学祝いのプレゼントや、美味しい食事などというのは単なる口実で、ただその人の喜ぶ顔が見たい。それはある意味でエゴイスティックな満足なのかもしれない。アランもそのようなことを言っていた。その当時はよく理解できなかったが、今は少しだけその気持ちがわかるような気がする。

ケーブルカーに乗って丘の頂上の教会を訪れようか、など

と話をしていたらあっという間に五時近くになってしまった。お昼ご飯をまだとっていなかったので、近くのレストランで軽食をとろうということになった。しかし私が乗る予定のバスの時刻が迫ってきていたので、大急ぎで食事を済ませて店を出なければならなかった。何歳になってもおっちょこちょいなのは相変わらずで、彼女を巻き込んで慌ただしく駅までダッシュし、また会おうねと言って別れた。

フランスの夏は長い。午後六時十五分のバスに乗って、まだ明るい空を見つめながら、夢のような午後の余韻と澄んだ水のような静寂を味わっていた。彼女の将来が明るいものでありますように。そしてアランがお土産を気に入ってくれるといいなと思いながら、私は目を閉じた。

◆リヨン風信(四十一)◆

遭遇

中川莉羅

六月のフランスでは猛暑が続いている。フランス南部の地域では、ここ一週間ほどで最高気温が三十五度から三十八度に達する見込みで、四十度近くに上るところもある。この季

節にしては異例の暑さだ。フランスのほとんどの一般家庭にはクーラーが設置されていないので、みな、想定外の暑さに喘いでいる。ただ、夜の冷気の訪れを待ちわびながら、日々の業務をこなすのみである。

夜型のアランは毎晩遅くまで仕事をしているので、私は朝の時間をほとんど一人で過ごしていた。まず教会に行き、競技場を散歩し、スーパーマーケットで買い物をして帰る。誰が課したわけでもないのに、いつのまにかそれが日課となっていた。ある日ふと、いつもは足を向けないコースを辿ってみると、民家の立ち並ぶゆるやかな坂道の先に、雑草に覆われた小道が現れた。もし私道だったら勝手に入ってはいけないかもしれないと思い、ユーターンしようとすると、「道に迷ったの？」という声がする。振り返ると、どこぞの窓から見知らぬマダムが私に話しかけている。五十代ころの女性だろうか、短い栗色の髪とオレンジ色のTシャツ、口元には感じのいい笑みを浮かべている。

「いえいえ、ただなんとなく散歩していただけなんです。ご親切にありがとうございます」

私はそう言ってその場を去ろうとした。マダムはなんとなく何かを言いたげに窓辺に佇んでいる。

「ねえ、丘の上の教会に行くならそこの道をお行きなさいな」

と、先ほどの小道を指して彼女は言う。

「でも、私道じゃないんですか？険しそうな道だし、危なくはないでしょうか」

「そんなことないわよ。みんなあの道を登っているわ。ただ、傾斜はきついけどね」

「そうですか。それなら、試してみます」

マダムはにっこりして、「良い一日を」と言ってまた窓の奥に消えていった。

彼女の言う「丘の上の教会」(Chapelle Bel Air)には、実はアランと一緒に行ったことがある。スーパーマーケットの裏手の坂道を登って行くと、小一時間ほどかかったように記憶している。そんなに長い散歩をする予定ではなかったので少々ためらったが、結局マダムに教わった道を行くことにした。確かに彼女のいう通り、道は険しかった。あちこちで茨が絡まりあい、足元には雑草が生い茂っている。鳥の声が高らかに響く。途中で猫を見かけた。慣れた足取りでひょいひょいと進んでいくが、私の足音が近づくにつれ、残念ながらどこかに逃げてしまった。あまりにも傾斜が険しいので、日頃運動不足の体には少々堪えた。途中で何度も足を止め、深呼吸をして前に進む。

そのように歩いて三十分くらいもしただろうか、突然視界が開け、目の前に野原が現れた。折しも空は泣き出しそうな曇り空で、暗澹たる雲の下にぽつりと佇む教会が見えた。私は細い道をぐんぐん登った。小道を辿っていくと、教会の横を通って正面までぐるりと回り込むような形になる。頂上に上り詰めるといよいよ教会が現れた。

簡素な設計のこぢんまりとした教会がそこにあった。灰色の尖り屋根や薄茶けたレンガの壁は、忘れられたおとぎの国の修道院を思わせた。誰もいないだろうと思ったが先客がいて、日に焼けたたくましい男性たちが二、三人で立ち話をしている。教会の裏手には中庭がある。私はそこに腰掛け、靴を脱いで裸足になった。ほんの少し雨の匂いを含んだ風が肌に心地いい。いつも行くスーパーマーケットも教会もぐんと遠くに見え、パズルのピースのようにきちんと風景の中に収まっている。ああ、こんな風に日常からほんの少し逸れただけで、なんと美しいものを見ることができるのだろう。普段

生活している場所なんてこの街のほんのちっぽけな一部にしかすぎないのだと思った。正午を告げる鐘の音が聞こえるまで、私はしばらくそこに留まっていた。

この小さな冒険譚はアランの興味をかき立てたらしい。いい機会なので、これからは朝早く起きて僕も散歩に付き合うよと言う。こうして、私たちは朝の散歩が日課になった。ある朝のこと、スーパーマーケットの裏手にある坂道を上っていると、アランが道の途中で立ち止まった。どうしたのと言うと、ちょっと来てごらんと言う。彼は身をかがめて、とある民家の庭をじっと見入っている。頑丈そうな柵で覆われたその庭にいたのは、なんと孔雀であった。レースのような羽根に覆われた瑠璃色の躰がはっきりと見える。小さな頭をくい、くいと動かしながら、孔雀は私たちの目の前を横切ってゆく。王者さながらの貫禄である。時折空を見上げてきょときょとと頭を振るしぐさが愛らしい。

夜になると孔雀の鳴き声が聞こえてくるので、いつかはお目にかかりたいものだと思っていたが、まさかこのようなところで遭遇するとは思ってもいなかった。野生の孔雀だというので、山奥にひっそりと身を隠しているのかと思っていたのだ。後日調べてみると、民家だと思っていたのは実はとあるホテルの中庭であった。いつのころからか、このホテルに野生の孔雀が二羽訪れるようになったそうだ。その鳴き声が

「レオン」と聞こえるということで、そのうちの一羽は「レオン」と名づけられた。もう一羽の名前は不明である。孔雀たちはあくまで彼らの自由意志でこのホテルに滞在しているらしく、気が向いたらふらりと別の場所に移動することもあるようだ。ホテル側も無理強いして彼らを飼おうとはしていないようだし、孔雀たちもさすらいの旅の合間にホテルを訪れているといった趣だ。その風通しの良い絶妙な関係が、いかにもフランスらしいなと思う。アランと私は、サーカスを見終わった子どもたちのようにそっと顔を見合わせた。そして、すっかり高くなった陽を浴びながら坂道を下って行った。

坂道を下りながら、私は「自由」について想いを馳せていた。「他者の自由を認める」というと聞こえはいいけれど、それは「もしかしたらその対象が二度と自分の元に帰ってこないかもしれない」という可能性を受け入れるということだ。ある日孔雀のレオン君が気まぐれな旅に出たとしても、それを笑って見送るということだし、帰って来るならばそれもまた良しと、門戸を開けたままにしておくということだ。そして他者の自由を認めるということは、自分自身の自由を認めることでもある。未知を抱きしめるということ。暗闇の中にぽつんと置き去りにされても、明日がどうなるかわからなくても、悠々と笑っていること。それは簡単なようでいて、案外難しい。

数日後、スーパーマーケットで、「自由」(Liberté)という名のヨーグルトを見つけた。昨今は「糖質フリー」とか「カロリーフリー」など「フリー」が流行っているのでその流れかと思ったが、どうもそのようなニュアンスでもないらしい。少し高かったが、思い切って買ってしまった。そのヨーグルトはこっくりと濃厚で、フルーツソースの甘酸っぱさとあいまってとても贅沢な味わいだった。疲れた体の隅々まで染みわたってゆくような美味しさだった。ああ、私は「自由」を味わって

しまった、もう元には戻れない、とふざけて言った。そうだねと、アランも笑った。

私もまた、レオン君のように気楽な風来坊の心を取り戻せる日が来るのだろうか。時間をかけて頑丈にこしらえてきた檻をすこしずつ、すこしずつ破っていこうと思う。

◆リヨン風信（四十）◆

異なる人々

中川莉羅

五月九日のロシア対独戦勝記念日が終了し、プーチン大統領はパトルシェフ氏に数日間政権を委任した。胃癌との噂だが、このまま引退の可能性もあるのだろうか。NATOの今後の動向如何によっては、全面戦争の恐れもあるという。美しい五月晴れにも関わらず、わたしたちの頭上には暗雲が立ち込めているようだ。

このように世界がめまぐるしく動く中、私とアランはいつもどおりの静かな生活を送っている。お互いの活動に没頭しつつ、空気のような自由を享楽しつつ。まるで円周上の定点のように。

日曜日の午前十一時ころ、いつものように近所の競技場を歩いていると、ある女性に声をかけられた。

「あなたもウォーキングしてるの？私もよ。よかったら、一緒に歩かない？」と。

年の頃は六十代くらいだろうか、短い髪の毛は暗褐色に染められ、瞳は人懐っこそうな輝きを浮かべている。ノースリーブにジーンズというラフな格好で、手首にはブレスレットが光っている。断る理由もなかったので、彼女の提案を受け入れることにした。

「ねえ、あなたはいつフランスに来たの？私は一九九七年だから、もうこれで二十五年になるわね。私ね、アルジェリアの出身なの。カビール人よ」

歩きながら、彼女は屈託なく話し続ける。アルジェリアと言えばアラブ人しか思い浮かばない私にとって、カビール人とはどのような人々なのかまったく想像がつかなかった。彼女によると北部に住む民族らしく、アラブ系の人々とは生活習慣や考え方が異なるらしい。

「ここに着いてから、私はきちんと真面目に働いてきたわ。言葉だって覚えたし、税金も払ってる。だってフランスにいるのだから、この国の人々と同じように振る舞うのは当たり前のことでしょう？」と彼女は言う。まったく同感だと言うと、残念ながらそうではない外国人移民も増えてきたと彼女は説明してくれた。表面上は穏やかに見えるこの国でも、水面下では不法入国者や犯罪者が後を絶たない。また、犯罪とまではいかなくても無職のまま住居手当を目当てに何年もフランスに滞在し続ける人々もいる。彼らのすべてが問題を起こしているわけではないが、残念ながら、彼女や私のような考えを持つ人々ばかりと言い切れないのも事実である。

「ある時ね、同国人を家に泊めてあげたことがあるの」と彼女は逸話を語ってくれた。「まあ、同国人と言っても、私のようなカビール人ではなく、アラブ系の女性をね。こちらは色々と親切にもてなしたつもりだったわ。ところがね」彼女は立ち止まり、少し声をひそめた。つられて私も立ち止まった。

「何が起こったと思う？なんと彼女は私のお財布から銀行やら小切手やら盗んでいなくなってしまったの。煙のようにね」それからカビール人の女性は警察に行って事情を話し、銀行で小切手やカードからの出金を調べ、幸いなことに犯人をつかまえて返金してもらえたそうだ。

「なんてことでしょう。昔はこうじゃなかったのに。人を信じられない時代になってしまったのね」と彼女は悲しそうにつぶやいた。「あなたもね、外出する時は鞄にパスポートやら銀行のカードやらを入れておかない方がいいわよ」とその女性は忠告してくれた。

私たちがおしゃべりをしている横を、二、三人のランナーたちが駆け抜ける。中には「こんにちは」と彼女に声をかけ

ていく人もいる。彼女はどうやらこの競技場の常連らしく、顔見知りも何人かいるようで、「がんばって」と若い女性ランナーを励ましたりもしている。

一時間ほども歩いただろうか、だんだん日が高くなり、私たちは歩き疲れてしまった。そろそろお暇しますと告げると、彼女は「車で来ているからあなたの家まで送ってあげる」と言う。「時にはね、神様にいいことをしてあげるのは大事なことよ。善行をする人間に、神様が意地悪をするわけないもの」

汗ばんだ顔にさわやかな笑顔を浮かべて彼女はそう言った。おそらく、本当に心の底からそう信じて生きているのだろう。とても素敵なセリフだと思った。けれど、いくらなんでも見ず知らずの人にそこまで面倒を見てもらうわけにはいかない。それに「初対面の人をたやすく信用するな」とアランから再三釘を刺されているのだ。どう断ればいいか分からず、スーパーマーケットに寄って帰るから大丈夫と、嘘をついてしまった。それでも彼女は「スーパーって、すぐそこのでしょ？近いじゃない。送るわよ」と続ける。私の返事が煮え切らないのを見て、「じゃあ、お好きにどうぞ」と彼女は言い残して去ってしまった。もしかしたら気分を害したのかもしれない。外国人同士としてフランスに暮らす楽しさや苦労話などを散々話し合った後で、最後には結局信頼してもらえないという寂しさを彼女の心に植え付けてしまったとしたら、申し訳ないことをしたと思った。

これまではこの小さな街で自分の生活のことだけを考えていた。通りを歩いていると確かにスカーフで顔を覆った女性をよく見かけるし、アランからも移民問題のことはよく聞いていた。しかし個人的に彼らと関わりがあるわけではないし、外国人であるという立場はお互い様なので、特に気にかけずにいた。というより、あえて触れないようにしていたという方が正しいかもしれない。

フランスの移民問題は十九世紀の産業革命に遡る。当時のフランスでは労働人口が圧倒的に不足しており、国力向上のために外国人移民を大量に流入させたのが始まりである。一八八一年には一〇〇万人ほどだったのが、一九三一年には二七〇万人になり、二〇二二年現在では三五〇万人から四〇〇万人と推定されている。一九〇一年まではベルギー人が多く、次いでイタリア人やスペイン人がトップだったのだが、近年ではアルジェリアやモロッコからの移民が多い。決定的なのは、やはり一九五四年から一九六二年まで続いた、アルジェリアの独立戦争であろう。一八三〇年から続くフランス領の支配から逃れ、自由を獲得するための闘いであった。一九五六年から一九七二年までの期間は「三十年の栄光」（Trente Glorieuses）と呼ばれ、アルジェリアの非植民地化に伴い、

移民の流入が激増した。これに拍車をかけるようにして制定された一九五八年のローマ条約により、人々が国家間を自由に移動することが認められた。こうした実に長い歴史的背景があり、今のフランスが成り立っている。さらに初代アルジェリア移民の次世代、三世代目の人々が現代のフランスで生まれ育っているわけだから、アイデンティティーの混乱が起こるのも当然であろう。この傾向はフランスのみならず西ヨーロッパ全土に及ぶといっても過言ではない。

なお、念のために申し上げておくと、この寄稿は政治的意図を持って書かれたものではない。それに外国人移民の全員が悪事を犯す人間だと決めつけるつもりもない。先に述べたカビール人の女性のように、まっとうに生きていこうと努力している人々もいる。けれどこの国で生きている以上、私も無関係ではいられない。国籍や言語、文化だけでなく、宗教も考え方もまったく違う人々をフランスはどこまで受け入れるのだろう。あるいはフランス文化を守るために、移民受け入れを拒否せざるを得ない日も来るのかもしれない。そのようなことを考えさせられた、五月のある一日だった。

◆リヨン風信（三十九）◆

気まぐれな魚

中川莉羅

四月一日、朝起きると窓の外が白かった。一瞬、エイプリルフールにかこつけて神様がふざけているのかと思った。しかしそれは紛れもなく雪だった。ほんの数日前までは二十度を越す陽気だったのに。めったに雪の降らない東京の景色に慣れている私にとって、それはちょっとした驚きだった。フランス語ではエイプリルフールのことを poisson d'avril (四月の魚)と称するのだが、今年はなんだかきまぐれな魚にからかわれているような気分だった。

不安定なのは天候だけではない。四月十日、第一次大統領選が行われた。現段階では、現職のエマニュエル・マクロン大統領が極右政党のマリーヌ・ルペン党首を抑えて優勢であるが、二十四日に行われる第二次選挙によって最終結果が明らかになる。コロナウィルス問題、ロシアによるウクライナ侵攻など問題が山積みの社会において、新大統領はどのような取り組みを見せるのだろう。フランス市民は固唾をのんで情勢を見守っている。

そのような折、日本に旅立つ人々をお見送りする機会があった。そのうちのおひとりは某有名企業のフランス支店長に就任されている日本人の方である。お仕事の関係でイギリスやドイツにも駐在されていたそうで、華々しいご経歴をお持ちだが、とても気さくで優しく、紳士的な方である。この度、就業期間を終えてご帰国されるとのことで、ご出発の前にお会いしようということになったのだった。

お会いした日は三月の末で、幸いにも天候に恵まれた。こちらのわがままで、リヨンから少し離れたこの田舎町までわざわざ来ていただいた。おまけに、可愛らしいリボンで包装

されたチョコレートをおみやげにと持ってきてくださった。ひたすら恐縮である。待ち合わせ場所の聖マドレーヌ教会を見学した後、桜並木を抜けて、お菓子屋さんに入ったり、街をぶらぶら歩いたりして一時間ほども過ぎただろうか。気が付けばすでに夕方四時をまわっていた。中途半端な時間だったためだろう、お目当てのお店では食事の時間が終わっているという。しかたなく、私たちは教会前の広場のバーに足を運んだ。看板犬というのだろうか、毛足の長い、まっくろな大きい犬が出迎えてくれた。店員さんは「食事の時間は終わっているんですが、よければフライドポテトならお出しできますよ」と言う。歩いた後ですこしくたびれていた私たちは、ありがたくその提案を受け入れ、テラス席に腰を落ち着けた。

フライドポテトをつまみながら、色々な話をした。日本に住んでいらっしゃるご家族のことや、ドイツやイギリスに滞在されていた時のお話、あるいはフランス社会について。海外に暮らす日本人であるという連帯感も手伝ってか、話は尽きなかった。あちこちにはねたり道を逸れたりしながら、言葉が毬のように転がってゆく。

ふと見ると、教会の広場の前になんだか人々が集まっている。居合わせた人々の格好から察するに、結婚式か何かではないだろうかと思われた。するとその推測を裏付けるかのように、大きく開け放たれた教会の扉から、一組の男女が現れた。三十代ころだろうか、新郎はブルーのスーツを颯爽と着こなし、パートナーをエスコートしている。新婦は歓びに顔を輝かせながら、片方の手で純白のドレスの裾を持ち上げ、片方の手は新郎にあずけている。まるで映画のワンシーンのようだった。真っ赤なスポーツカーをゆっくりと走らせるふたりを、人々が追う。おそらく披露宴の会場に移動するのだろう。私たちのいるテラス席からも歓声が上がる。日本では見知らぬ人の結婚式に声をかけるなどありえない光景だが、こちらの人々は違う。パーティーが大好きな彼らは、楽しんだもの勝ちだと言わんばかりに、新郎

新婦に拍手を送り、口笛を鳴らし、叫ぶ。ああ、これがフランスなのだな、と思う。

数日後、その方が日本に無事に帰国されたという連絡を受けた。きっと元の生活に戻り、お忙しくご活躍されているのだろうと思う。

そしてまた四月一日には別の人々にお会いした。日本語レッスンを受講してくださっていたフランス人の生徒さんふたりである。仮に名前を「レイモン」と「ルドヴィック」としておこう。彼らは約一年半かけて日本への留学計画を準備していたのだが、コロナ騒動のため一時期は計画の延期が危ぶまれていた。けれどこのたび日本政府の水際対策の緩和に伴い、ようやく彼らの夢が実現することになったのである。感激もひとしおだろう。

当日、雪でまっしろになったタラールの街までふたりで来てくれた。四月だというのに、私たちは寒さで震えながら店へと急いだ。あたたかい店内で食事をとりながら、色々なことを話した。留学先の語学学校のこと、好きな日本人の歌手のこと、滞在予定である京都の文化や生活、そして祇園祭のことなど。ふたりとも日本語の知識をしっかりと身に着けていて、日本社会の最新情報などもこまめにチェックしているため、時には私よりも詳しいことがある。とはいえ新しい土地に旅立つ期待と不安に揺れ動いているようだ。

「ああ、日本での生活ってどんな感じかなぁ。毎日、日本人と話して、日本の料理を食べ、日本語で夢を見たりするのかもしれない。今までパソコンの画面で見ていた風景に、実際に足を踏み入れるってどんな気分だろう」とレイモンがため息をつく。

「大丈夫だよ。きっとうまくいくさ。リラックスして楽しもうぜ」とルドヴィック。

「莉羅は日本に帰る予定はないの？フランスに住んでいて、日本が恋しくならない？」とレイモン。

「そりゃあ、まったく寂しくないと言ったらうそになるけど、でも、平気よ。今はインターネットがあるから、家族とも顔を見て話せるし。それにスーパーに行けばお米だって買えるもの」

こう言うと、彼らはすこし不思議そうな顔をする。彼らから見れば、理想郷を捨ててあらぬところをさまよっているならず者のように見えるのだろう。

立場は逆だけれど、しかし、私たちはおそらく同じ景色を見ているのではないだろうか。生まれ育った国を飛び出して、蜃気楼に包まれた遠い地に想いを馳せる。「憧れ」などという、漠然とした、けれどたえまなく胸に湧き上がる情熱を燃料にして進むちっぽけな船のようだ。

« L'endroit idéal est-il toujours ailleurs ? »（「理想郷は常にどこか他の場所にあるのだろうか」）というメッセージをふと思い出す。それはルフトハンザ航空がリヨンの街に掲げている広告のキャッチコピーで、通学の際によく目にした。「お前はなぜフランスに来たのだ」と問われているようで、複雑な気持ちになったものだった。

答えはまだ出ていないけれど、ひとつ言えるのは、私たちは新しい景色を見ることでしか、慣れ親しんだ風景を愛することができないだろうということだ。どこかを目指すことが旅なのではなく、目に映るすべてのものに目を見張り、味わい、楽しむこと、それ自体がすでにギフトなのではないか。最近ではそう思うようになった。私たちを乗せたそれぞれの船が、光に満ちたまばゆい海を進んでいけるようにと、切に願う。四月の気まぐれな魚がほほえんでいるみたいに、窓の外では溶けだした雪がきらめいていた。

◆リヨン風信（三十八）◆

ベイビーステップ

中川莉羅

ついそこまで来ていた春を押し流すように、暗く、激しい雨が降った。夜の間にあわてて世紀末がきて去っていったみたいに、翌朝、天窓はひどく汚れていた。

二月二十四日、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が開始されて以来、世界情勢は不安定である。欧米諸国はロシアへの経済制裁を加え、一方、日本をはじめ各国の政府はウクライナ移民の受け入れ態勢を整えている。三月十八日、プーチン大統領が出席してロシア安全保障会議が開催されたが、停戦協議でのウクライナ政府の対応について、「双方が受け入れ可能な合意を目指す真剣な姿勢がみられない」と批判した。残念ながら、ウクライナとの和平交渉にはまだ至っていないようである。

一方、コロナウィルス対策はどうかというと、フランスでは三月十四日から規制緩和になっている。これまでは、レストランやバー、映画館、劇場、地域間移動列車等においてはワクチン・パス（passe vaccinal）の提示が求められていたのだが、今後は提示義務が一時的に取りやめとなる。また、公共交通機関を除き、屋内でのマスクの着用義務も一時的に解除される（ただし陽性者や濃厚接触者、症状のある者

や医療従事者のマスク着用は引き続き推奨される)。もちろん規制緩和は喜ばしいが、一方で、これは次期大統領選に向けてのキャンペーンの一環なのではないかとの噂も飛び交っている。人民のこころを掌握するための、一時的な政策にしか過ぎないのではないか、というわけだ。真偽のほどは定かではない。

こうした不安定な情勢にも関わらず、春は今年もやってくる。空気が春めいてきたせいなのか、最近、アランは何かにつけてビデオ撮影のことを口にするようになった。以前、日仏文化の紹介ビデオを制作していたのだが、忙しさにかまけてすっかりほったらかしになっている。それを再開すべきだというのである。

ここタラールに住み始めてから約一年半が経った。当初は家が見つかるまでの短期滞在のつもりだったのに、ちゃっかり腰を落ち着けてしまった。けれど「たまに訪れる見知らぬ街」が「生活する場所」に変わってゆくと、人間というのは不思議なもので、驚きや発見を求めなくなるものだ。アパートのすぐ近くにある聖マドレーヌ教会に行き、競技場まで散歩をし、その後スーパーマーケットに寄って帰る。判で押したように同じ行動しかしていない。

「でもさ、君にとってはあたりまえの生活でも、日本に住んでいるひとにとっては新鮮かもしれないよ」とアランは言う。

「確かにここはちいさな街だけれど、自然がたっぷりあるし、なんといってもボルドー地方なんだから、見どころは山ほどある。君は宝の山の上に座っていながら気づいてさえいないんだ。もったいない話だと思わない？」

確かに彼の言う通りかもしれない。私はいつのまにかこの街のことならなんでも知っているつもりになっていた。けれど本当にそうだろうか。タラールのシンボルである孔雀のレオン氏にすら、まだ会えていないというのに。腰の重い私も、再三アランに諭されてやっと撮影を再開する気になった。といっても、携帯電話を片手に街をうろうろするといった、散歩に毛の生えた程度にしか過ぎない。それでも、改めて教会に足を踏み入れてみると、いままで多くのものを見落としていたことに気づく。ファサードはギリシャ建築を思わせる美しい彫刻で飾られ、室内に入ればイエスの受難を物語るステンドグラスのひかりが訪問者を受け入れてく

れる。祭壇に向かうまでの通路にはぐるりと聖人たちの彫像が置かれており、中でも最も目を引くのはピエタ像であろう。ただ漠然としか見えていなかった風景が、突然くっきりと目の前に迫ってくる。教会の中の静寂にさえ聖人たちのひそやかな息遣いが聞こえるようで、私は意味もなく忍び歩きでその場を後にした。

続いて向かったのは野外競技場である。競技場といっても、子どもたちのサッカーの試合やジョギング大会などに使用されている程度の運動場みたいなもので、ふだんは地元の住民たちが散歩したりピクニックしたりしている。そこで中学生くらいの五、六人の子どもたちに出逢った。アジア人が珍しいのだろうか、私の存在を推し量るような五秒間ばかりの沈黙の後、ひとりの少年が「こんにちは(Bonjour!)」と声をかけてくれた。

「タラールに来るのは初めてなんですか？よかったらレストランとか、バーとか、色々紹介してあげますよ」と言う。私はすこし迷ったが、そのころはまだ件の衛生パスがないとお店に入れない時期だったので、せっかく案内してもらってもふいになってしまうと思い、丁寧にお断りした。彼らはなんだかおっかなびっくりといった様子でぴょこんと挨拶して、また去っていった。

それからほどなくして雨が降り始めた。さきほどまで明るかった空の向こうから、なにやら不吉な予感のする雲がやってきて、さあっと雨が降ってきてあっけらかんと去っていった。いつもなら雨の時間帯に散歩なんてついていなかったと悔やむところなのに、その日私はそんな気分になれなかった。雨上がりの街がいつもより美しく見えたせいかもしれない。

後日、アランと一緒に街の商店街に出かけた。家族にプレゼントを贈るためである。リヨンに住んでいたころは、節約事情のために家族のために何もしてあげられなかった。けれどここタラールでは、物価そのものがリヨンよりやや安いこともあり、すこし贅沢ができるようになった。そういえば、こちらに越してきてからまだ入ったことのないお店がたくさんある。今回立ち寄ったのもそのうちのひとつで、雑貨や食品を扱っているこじんまりとした感じのいいお店である。日本へ贈り物をしたいのだというと、店主と思しき男性が愛想よく応じてくださった。色とりどりのチョコレートだの、テリーヌの瓶詰だの、よい香りのするお洒落なキャンドルだの、見ているだけで幸せになるような品揃えである。コーヒーやお菓子をたっぷり詰め込んだギフトセットを包装してもらい、お店を後にした。

「今日は付き合ってくれてありがとう」と私はアランにお礼を言った。いつも見慣れているはずの商店街の奥には、自分ひとりではきっと入る気が起きなかっただろう。

「いいんだよ。せっかく何かを贈るなら、フランスらしいものの方がいいだろ」とアラン。それもそうだな、と私は思った。こうしたちいさな、ちいさな一歩が、日常を少しずつ変えていくのかもしれない。

「ベイビーステップだね」と私は言った。それは以前にふたりで観た映画の中で、主人公の男性が主治医に言われた言葉だったのだ。アランはちいさく笑った。

こんなふうにのんきに買い物ができた日々を、いつかなつかしく思い出すこともあるかもしれないと思う。戦争の爪痕はヨーロッパにまで及ぶのだろうか。マクロン大統領は、必要とあればフランスが参戦する可能性もある、などと物騒な意見を述べている。雨上がりの空の青さや、競技場で出逢ったあの子どもたちの笑顔を、ぼんやりと思い出しながら私は眠りについた。

◆リヨン風信(三十七)◆

風光る

中川莉羅

風がきらめいているような午後があるかと思えば、灰色の天窓を見上げる夕べもある。天井の裂け目からぽつりと落ちる水滴が眠りを覚ます夜、しかたなく起きて冷たい足指をさする。春は近いようでまだ遠い。

カナダではトラックが連日クラクションを鳴らしている。「フリーダム・コンボイ」(convoi de liberté)と呼ばれるこの抗議活動の発端は、一月十五日より米国との国境を越えて移動するトラック運転手へのワクチン接種証明書の提示が義務付けられたこと。これを受けて、二十三

日にトラック運転手を中心に抗議運動が本格化し、各地に広まっていった。

一方、ウクライナの北大西洋条約機構（NATO）への加盟、およびクリミア半島奪還の計画が囁かれている。ロシアのウラジーミル・プーチン大統領はエマニュエル・マクロン大統領との共同記者会見で、ウクライナのNATO加盟は、欧州の国々とロシアとの軍事衝突を意味すること、そしてそれはなんとしてでも阻止せねばならないことを訴えた。

平和な国でのほほんと生きてきた私には、それらの動きが世界情勢にどのような影響を与えるのか、わかっているようでやはりわかっていない。最悪の場合には欧露戦争が勃発する可能性もあるとのことだが、まるでそのような情報を拒否するように、日常の些事へと脳細胞は逃げたがるのだ。スーパーで買い物しなくちゃ、それにレッスンの準備もまだだった、そういえば銀行カードの問題は解決したんだっけ、等々。そうして時間を細かく切り刻み、箱庭のようなちいさな世界に逃げ込めば、ややこしいニュースも、悪魔も神様も、私をスルーしてくれるのではないかとどこかで期待している。

昨年の五月に大学に休学届を出して以来、私の日常生活はおだやかさを取り戻した。どこかのキャンバスに描かれた春の海のように、額縁におさまった波は音を立てずにじっとしている。けれどそれは、すべての出来事から私を守ってくれることを意味するわけではない。

一月十八日、母方の祖母が亡くなった。享年九十七歳だった。母親からのメールでそれを知った。後日、母が葬儀の写真を送ってくれた。写真の祖母は、つるりとした綺麗な顔をしていた。本来なら私も駆けつけなければならないのに、コロナ禍で行けずじまいだった。思えば最後に祖母に会ったのは、二〇一八年、渡仏直前の夏だった。それ以来、卒業論文だのなんだのとバタバタして帰郷のチャンスを逃し、そうこうするうちにコロナ騒動が始まった。こうなる前に、無理をしてでも帰国して祖母に会いに行くべきだったと悔やまれる。

不思議なことに、思い出すのは子どものころに夏休みで帰省した時に逢う祖母の顔だ。淡いグリーンのワンピースに白いエプロンをして、背筋をしゃんと伸ばして台所に向かう祖母の後ろ姿。朝食には、祖父のためには和食を、帰省した私たちには洋食をそれぞれ用意してくれていた。準備もずいぶん大変だっただろうと思う。けれど子どもだった私には、祖母の大変さを思いやることなど出来なかった。ただ大好きなおばあちゃんに会えたことが嬉しくて、隙を狙っては彼女のエプロンのリボンをほどくという遊びを毎年懲りずに行っていた。祖母はニコニコしながら、「こらーっ、誰だー！」と、私のいたずらに付き合ってくれたものだった。

トーストにバターを塗る音(ブランコに乗るときの地面を蹴る音のようだといつも思っていた)。
グリーンサラダの中のピーマンのあざやかな緑。
お母さん、私がするから無理しないでよ。ええっちゃ、あんたはじっとしとき、という、母と祖母のやりとり。
今日はこのあとデパートでも行こうかね、と話している祖父のバリトンボイス。
私の隣に座っている、小学生くらいの姉の、子どもらしい肌の匂い。
向かいの屋根瓦を照らすうるさいほどの白い光。

そうしたことが映画の一場面のようによみがえる。それは遠い記憶なんかではなく、今もあの街のあの家の中で繰り広げられている光景のように思える。そう、そのあとはいつものようにあのデパートに祖父が連れて行ってくれて、父と合流して一緒に買い物をするのだ。人ごみが嫌いな祖母もしぶしぶついてきて、喫茶店でおなじみのレモンスカッシュを頼むだろう。脳は都合のいい錯覚を起こす。あのシーンが見られないのは、時間のへだたりのせいではなく、距離のせいなのだ。今はただちょっと遠くに離れているだけだから、あの場所に戻ればきっと、また会えるだろうと。

母から聞いた話によると、祖母は若い頃に大変苦労したそうで、そのせいかとても気丈な人だった。三人姉妹の長女ということもあったのだろう。勤務先の会社では「歩く生き字引」と呼ばれていたほど、物覚えがよく勤勉なひとだったそうだ。弱みを見せずに生きてきた強いひとだったのだろうと思う。けれども私が知っているのは、ただひたすら優しい祖母の姿だ。

悲しみは乾き切らない絵具のように、マーブル模様になって躰のどこかにひそんでいる。夜になるとそれは私の躰からじわりと滲みだし、部屋の天井に、壁に、床に染み込んでゆく。「時間は二度と戻らない」というただあたりまえの事実が、雨水のように冷たく降ってくる。私は自分の怠惰と、これまでの時間を呪った。祖母の訃報は、鏡のように私の人生を照らし出した。会おうと思えば会えるはずだったひとがいるのにそうしなかったこと。ほんのすこしの勇気が足りなかったために避けてきたいくつもの道。そうしたことが白々と夜の闇に浮かび上がってきた。

それなのに朝になると私のこころはまるでつるんとしていて、それはそれとして、とでも言うように朝食の支度や仕事の準備にとりかかる。パイロットのいない飛行機のように、放っておいてもこの躰も頭もくるくる動くのだ。それはなんだかあさましいことに思えた。けれどどうしようもない。まだらな悲しみを靴箱の隅につっこんで、いつものように散歩に出かけた。教会に行き、競技場まで足を延ばす。道の途中で見つけた家具屋の看板に「在庫一斉処分(Tout doit disparaître)」と書いてあるのが見えた。直訳すると、「すべては消え去らなければならない」という意味だ。そう、いつかすべて消えてしまうのだ。遠くにかすんで見える丘の稜線も、見飽きるくらいに毎日通っているスーパーマーケットも、私自身も。涙があふれそうになり、空を見上げた。それは雲がふるえながら銀色に光っているような初春の空だった。ただ綺麗だった

ので馬鹿みたいに口を開けていつまでも見ていた。きっと祖母はむこうがわに到着したのだろう。何の根拠もないが、私はそう思った。きっと俳句を詠む祖父の横で、今ごろお茶でも淹れているのだろう。本当はそんなことは誰にもわからないし、架空の神様を創り上げるのと同じくらい、馬鹿げたことかもしれなかった。でも私はそう信じたかった。

泥だらけのスニーカーを踏みしめて、私はスーパーマーケットに向かう。まだまだ世界は動き続ける。生きていられるとは、なんと贅沢なことなんだろう。まだら模様の悲しみは太陽のひかりにいつか溶けてゆくだろう。空は笑いながらきらめいていた。

リヨン風信(三十六)

『新風』

中川莉羅

年が明けた。フランスで迎える年はこれで四年目になる。街を歩くと、教会の広場にはきらめくガラス玉やガーランドで着飾ったクリスマスツリーがあいかわらず佇んでいる。まるで次のデートを待ち焦がれてお気に入りのワンピースを脱ぎかねている若い娘のようだ。

ヨーロッパではクリスマスから一月六日の公現祭(L'Épiphanie)までがひとつづきの時間帯と捉えられているようで、その期間はクリスマスツリーを出しっぱなしという家庭も少なくない。日本では

「クリスマス」と「お正月」はまったく別物で、年明けになると身がきりっと引き締まるようなおごそかな気配が漂っているけれど、フランスではその二つはあまり明確に線引きされていないようだ。シャボン玉でできた七色のトンネルのように、その夢のような時間はいつまでもふわふわと街を覆っている。

リヨン在住の日本人の友人が帰国することになったと知らせを受けたのは、去年の暮れのことだった。ここでは、彼女の名前を仮に香澄(かすみ)としておこう。パティシエ志望だった彼女はフランスで修行したいと単身ストラスブールへ留学。有名店で修行を積んだ後、日本に一時帰国した。フランスで出逢った今のご主人との長い遠距離恋愛を叶えるために再び渡仏してリヨンの地を踏み、今では二児の母である。しかし子どもの教育や日本の家族のことを考えると、母国に帰った方がいいのではないかと、彼女は長い間悩んでいた。それがこの度、ついに念願が叶って日本に再帰国することになったのである。私としては、嬉しいような寂しいような、少し複雑な心境である。

ずいぶん昔のことになるが、リヨンに来る前にストラスブールに留学していた時期があり、彼女とはそこで知り合った。私にとっては初めての留学経験で、右を見ても左を見てもとまどうことばかりだった。けれど毎日が新鮮で、泣いたり笑ったり、にぎやかな日々だった。

今でも思い出すのが、友人たちの新居パーティーに呼ばれた日のことである。新しいアパートの主はフェリックスと陽平である。フェリックスはフランスとドイツのハーフの男の子で、繊細で気立ての優しい親日家であった(彼はその後来日し、日本で家庭を築くことになる)。彼のルームメイトの陽平は日本人の学生で、専攻は哲学。フランス人顔負けの素晴らしい論文を書くという噂の秀才であった。けれどそれを鼻にかけるでもなく、気さくで明るい人柄の陽平はフランス人の友人も多く、フェリックスとも気が合うようだった。ちなみにフランスではルームシェアをするのは決してめずらしいことではない。特に学生時代は、友人と同居して家賃を折半するというのはよく見られる光景である。

そのようなわけで香澄と私、そしてその他たくさんの人々がパーティーに招待された。しかしフェリックスと陽平ははりきりすぎたせいか、誰を招待したのか本人たちでさえ把握しきれていな

いようで、次から次へと招待客が玄関口に押し寄せる。しまいには招待された人物の友人、そのまた友人の友人まで駆り出される始末で、アパート内はちょっとした混乱に包まれることになった。お菓子やジュース、宅配ピザなども底をつこうとしていた。香澄と私はなんだか居ても立っても居られず、おもむろに立ち上がると台所に向かった。

「ねえ、なんだって私たちはこんなところでせっせと玉ねぎなんて刻んでいるんだろうね」

と私。

「ほんと、ほんと。招待された立場なのにね。それにしても人数が多すぎるんだよ。でもさ、なんだか面白いよね。ありあわせの材料でも、がんばれば何かできるでしょ」と香澄。

彼女はそのように責任感の強いところがあって、そのせいでおそらく苦労したことも多かったのではないかと思う。

けれど彼女のすごいところは、そういったことをすべて笑い話にして明るく受け流すところだった。なんでも深刻に考えがちだった私にとって、彼女のさっぱりした気性はとても好ましく感じられた。他にも逸話はたくさんあるけれど、ここではすべてを語りつくせない。

約一年間の学業を終えて、多くの留学生たちが母国へ帰っていった。香澄との交流は細々と続いていたけれど、お互い仕事で忙しくなり、連絡をとる機会は少なくなっていった。それから幾歳月が過ぎただろうか。彼女は日本で働きながら再渡仏計画を着々と進めており、私はといえば、語学学校に勤務しながら半ば夢を諦めているところだった。

最後に彼女と会ったのは一年半ほど前だろうか、リヨンのとあるカフェだった。七月も終わりになろうかというある日のことで、夏にしては妙に肌寒く、ざわざわと風が吹いていたことを思い出す。忙しい時間を縫ってかけつけてくれた彼女は、細身の躰にシャツとジーンズというさりげない恰好で、昔と変わらないように見えた。すでに二児の母としてフランスに家庭を持っている彼女と、遅まきながら二度目の留学という夢を叶えた私。時は砂のように流れ、決して昔のように戻らないということはわかっていたけれど、そのようなぶあつい時間の積み重ねなど感じさせないほど、私たちは自然に話すことができた。当時私はビザ更新の時期を迎えており、三年目の留学生活が続けられるかどうか、という局面に立っていた。彼女は彼女で、この先フランスにいてもいいのだろうかと悩んでいるところだった。

「なんかさ、こうしてまた会いたいと思うタイミングって、お互いに何かの岐路に立たされている時なんだろうね」

ひとしきり話した後で彼女はそう言った。

そうかもしれない、と私も言った。人と人との縁には、たぶん色々なかたちがあるのだろうと思う。学生や会社員のように、毎日まいにち同じメンバーと顔を合わせて絆を深めていくこともあれば、風が吹くようにふと想い出す人というのもいる。

フランスは湿度の低い風土もあってか、人と人との関係もかろやかであるような気がする。会いたいと思えば会えばいいし、タイミ

ングが合わなければ仕方ない。そっと肩をすくめて、また会おうねと言うのみである。日本社会のように、いわゆる社交辞令としての「お茶でもしましょう」というのは、ここフランスではごくごく少ないような気がする。「今度、会おう」というのは文字通りの意味であって、会いたくもないのに「ぜひ！」などと答えてはいけないのだ。そのように考えると、日本社会に生きていたころの私はなんとたくさんの嘘を重ねて生きてきたことだろうと思う。もちろん、ここでも潤滑油としての優しい嘘や、うわべだけの笑顔がまったく存在しないわけではない。けれどそうした大人の事情というやつを、フランス人はまるで香水のように爽やかに振りまいて去ってゆくのだ。会いたい人とだけ会えばいいじゃないのと、それはわがままでも何でもなく、風にのって旅をする蝶のようなかろやかさで、こちらの人々は言うのである。その空気の中で、私はやっとすこし自由に息ができるような気がするのだ。

香澄とも、きっとまたいつかどこかで会える日が来るだろう。帰国してからの日本での生活が、彼女とご家族にとって有意義なものでありますように。誰もいないいつもの教会で祈る。ミルク色の霧におおわれた街のかなた上空を、飛行機雲がまっすぐに飛んで行く。母国では青空が広がっているといいなと願う。

◆リヨン風信(三十五)◆

街角のヒーロー

中川莉羅

新変異ウイルス「オミクロン株」の拡散防止の対策として、ワクチン非接種者を対象とした再ロックダウンの噂がヨーロッパ全域で囁かれるようになった。ヨーロッパでの一週間当たりの新規感染者数は二百万人を突破。しかし政府の対策を受けて、欧州各国で抗議運動も広がっている。

フランスではロックダウンとまではいかないものの、十八歳以上のすべての成人を対象に、十一月二十七日より三回目のワクチン接種を開始するそうだ。このような不安定な情勢の中、毎年恒例の『光の祭典』がリヨン市内にて行われた。十二月八日から十一日までの四日間、大々的な光のスペクタクルが惜しげもなく披露され、例年通りの盛況だったと聞いた。リヨンから離れた場所に住んでいる私は、残念ながら今年そのイルミネーションを拝めなかったけれど、それでもそのニュースは胸を明るくしてくれた。

そのような折、いつものメンバーがここタラールの街に遊びに来てくれることになった。いつものメンバーとは、アランの従弟のグザビエと、先日挙式したばかりの新郎のトマである。新婦のマリーは残念ながら別の用事があったため来られなかったのだが、少し早めのクリスマスパーティーをささやかながら行うことになった。仕事先の同僚とはいえ、個性も年齢もバラバラな彼らは、それでもどこか馬が合うらしい。知性やユーモアが見えない糸のように彼らを結びつけ、ひっそりと星座を形作る。私はその星座を遠くから見守る天体観測者のようだ。話題についていけず歯がゆい想いをすることも多いが、外国人の私にもみな、さりげなく気を遣ってくれる。

今回はクリスマスパーティーを兼ねた合同の誕生日パーティーだったので(偶然ながらグザビエ、アラン、私の誕生日はそれぞれ二週間ずつくらいずれて十一月と十二月に集中している)、人の好いトマは私たち全員にプレゼントを用意してきてくれた。アランには革の財布と本、グザビエには上等のウィスキー、そして私には洒落たスカーフ。それは水色を基調とした大人っぽい柄のスカーフで、肩に羽織ると肌に吸いつくようななめらかな手触りである。おそらく上等の品であろうと思われる。マリーが選んだのだと、トマが教えてくれた。なにも用意しなかった私はすこし恥ずかしく思った。お礼にと、アランが自作のイラストポスターを皆に配った。「いつか有名になるかもしれないからサインもいれてくれ

よ」とトマが言い、アランは「サインなんてはじめてだな」と半ば照れながら、それでも嬉しそうにペンを取っていた。

いつものことながら、話題はあちこちに及ぶ。会社の近況から始まり、次年度の大統領選挙とその有力候補者について、ナポレオンの偉業について、はたまたメサイヤコンプレックスについて。アランのナポレオン崇拝はいつものことなのだが、今回、それに異を唱えたのはトマである。曰く、先人の偉業を称えるのはいいが、それに固執すべきではない。今のこの世界において、自分たちの力で新たな道を切り開くべきではないかと。この発言に対し、グザビエもアランも黙ってはいなかった。何せ二人は人間心理を読み解くのに長けており、時には超能力者ではないかと疑わしくなるほど勘の鋭い人々である。

「要するに、君は自分の力だけで人生を切り開くべきだと、そういうんだね」とアラン。「ナポレオンを凌ぐような、世を制圧する力が自分に備わっていたらと、そう思うわけだろ？」

「いや、そこまでは言わないよ。僕は凡人だ。でも、僕は世の中の役に立つような立派な人間になりたいし、常に前進しつづけたいと思っているんだ」とトマ。

「でも、気をつけろよ」とグザビエ。「自分にはきっと見知らぬ力がまだ眠っているはずだ、世界だって変えて見せると、意気込むのはいい。なんといっても君はまだ若いのだから。でも、それは理想化された自我の肥大、ってやつかもしれないぜ。人間にとって自分の平凡さを認めるのは、何よりも苦痛なことだから」

「そうそう、その通り。だけど自分がどうしようもなくちっぽけな人間だと認めることで、はじめて見えてくることもある」とアランも頷く。

「でも、それじゃあ、『だめな自分』に満足して終わってしまうんじゃないだろうか」と熱っぽくトマは反論する。「自分はちっぽけで、平凡で、世の中を動かす力など到底ないとすべての人間が思うのなら、この世界に光も見えないのではないだろうか」

「それのどこが悪いんだ？」とグザビエ。「すべての人間が自分自身の真の姿に直面するのは悪いことじゃないさ。幻想に破れて、何もかも失って、それでも生きていく価値があると知るのは、フランス全土を統一するのと同じくらい尊いことじゃないだろうか」

この日の話題は結局冗談に紛れて別のテーマに移っていったのだが、それは私の胸の中にぽつりと残った。消し忘れたろうそくの火のように。

それから数日経ったある日のこと。みぞれ雪の降る土曜日の夕方、仕事を終えた私はアランの誕生日ケーキを買いに行った。お気に入りのケーキ屋さんが街角にあるのだ。私たちはその店のなじみ客になり、そこに立ち寄ると店員さんと少しだけおしゃべりをするようになっていった。しかしその日、肝心の本人が体調を崩し寝込んでいたので、私ひとりでそのケーキ屋さんに向かったのだった。

「こんばんは。いらっしゃい」といつものように愛想よく出迎えてくれた店員の女性の姿が、いつもと違う。長かった髪の毛を短く刈り上げており、ふくよかだったシルエットは心なしかほっそりしたようである。別人のような姿だったので、一瞬、彼女だとわからなかった。

「髪を切ったんですか？気が付きませんでした」と私。

「ああ、これはね、違うのよ。実は癌の治療を受けていてね。薬の影響で髪が抜けてしまったの。今はもう大丈夫よ」と彼女はさばさばとした様子で言った。私は一瞬言葉を失ってしまった。そのような過酷な状況にあっても、まだ仕事をしているひとがいる。雪の降る夕方に外出なんて億劫だなと思った、私の出不精さ加減を恥ずかしく思った。

彼女はかろやかな笑顔を見せた。

「本当に、心配しないでね。パティスリーの仕事なんて年中忙しいし。それに、痩せたから躰も軽くなって動きやすいのよ」

そして彼女はいつも通りの慣れた手つきで、頼んだ品を箱に入れてくれた。今日は友人の誕生日なのだと告げると、綺麗な銀色のリボンをつけてくれた。私はお礼と励ましの言葉を言い、店を去った。

帰宅すると、アランが午睡から覚めたところだった。ずいぶん長く眠っていたようで、誕生日なのに体調不良なんてアンラッキーだとぶつぶつ言っている。先ほどの店員さんの話をすると、それはかわいそうに、と言った。

窓辺に立つと、消え残った雪が天窓に貼りついているのが見えた。月の光がパッチワークのようなでこぼこの空からこぼれ落ちてくる。それは世界中の人々の疲れ切った横顔をやさしく照らしているのだろう。世界にはきっと、見えないヒーローたちがたくさんいる。躰に癌を抱えながらも、ケーキをやさしく包んでくれたあの女性のことを思い出す。きっと私たちの大部分が、そのようにひっそりと生きている。ナポレオンではなく、ハリウッドスターでもない、街角のヒーローたちはきっと今日もどこかで働いている。

リヨン風信（三十四）『カルマ』

中川莉羅

アントニー・フィリップスの奏でるピアノの音がやわらかく響く日曜日の午後。ミルクを溶かしたような水色の空を白い鳩が飛んでゆく。フランスに来てから三年と少し、そしてこのタラールに引っ越してから一年が過ぎた。私はあいかわらずこの小さな街の中にぽつりと浮かんでいる。

フランス滞在中に様々な人と出逢い、それぞれの人の物語を見てきた。ある人はくりかえし訪れる恋の罠に囚われ、またある人は慢性的な病に苦しんでいた。本人が望むと望まぬとに関わらず、どういうわけか、それは起こる。まるで一面に晴れ渡った空の下で、その人の頭上にだけ雨がばらばらと降ってくるように。

私の場合は、よくお金を失う。特にフランスに来て以来、その頻度は増してきているようだ。初めてそれが起こったのは、二年前の夏のことだった。その日私は友人に逢うために地下鉄に乗ろうとしていた。ところが買ったはずの切符がどうしたわけか見つからない。それは鞄の奥深くに深海魚のようにもぐりこみ、すいすいと泳ぎながらどこかへ消えてしまった。運悪く、その日はちょうど不正乗車を防ぐためのチェックが行われていた。私は係員の男性に事情を説明した。男性はもう一度鞄を探すようにと言ってくれた。だがいくら探しても同じことだった。仕方なく私は申しつけられた通りの金額をクレジットカードで支払った。確か六十ユーロ(約七九〇〇円)だったと思う。貧乏学生の私にとって、六十ユーロは二週間分の食費を意味した。それなのに私はハイハイと支払ってしまったのだ。おまけに切符は後日鞄の底から出てきた。現金で払っていれば返金の可能性もあったかもしれないが、クレジットカード会社から引き落としされてしまった後だったので、後の祭りである。

それはとても小さな出来事だったので、笑い話で済むはずだった。ところが運命は私を見逃しはしなかった。日本からフランスの銀行口座に振込をする際に手違いが起き、かなり大きな金額を失ったり、アパートを探せば詐欺師に騙されそうになったりと、ありとあらゆるかたちのお金のトラブルが起こった。そしてその金額はどんどん大きくなっていった。

友人は私に厳しく警告した。《Errare humanum est, perseverare diabolicum》(失敗は人間的だが、それを繰り返すのは悪魔の成せる技である)と。

「だって、私はここでは外国人なのよ。あんな風に電話口で専門用語だの数字だの並べられて、何を言ってるかわからないわよ」と私。

「そんなの言い訳にならないよ」と友人は言う。

「ねえ、僕だって十年間日本に住んでいたんだぜ。言葉に不自由するのがどういうことかぐらいわかる。でも、僕のことをカモろうなんて輩にはお目にかかったことがない。なぜだと思う？『外国人だからわかりません』って電話を切るのさ。君だってそうしたらいいだろう」

それも確かにそうである。なぜ私にはそのような簡単なことが出来ないのだろう。

詐欺師たちは言う。今この商品を手にできるのはとても幸運なことだ、他の人間にこのチャンスを譲り渡してはいけない。あるいはこれを購入しなければとんでもない災難に見舞われるだろうと。彼らはこうしたことをものすごい早口でまくしたてる。まるで地球上の空気が五秒後になくなってしまうと恐れてでもいるように。そして私のような人間は言われるがままにお金を払ってしまうのだ。でっちあげられた不幸から逃れるために。

そのようにして失った(あるいは失いかけた)お金は、返金されたものも、闇の中に消えていったものもあった。いずれにせよ、すべては私の不注意から出たことなのだ。私は失ったお金を取り戻すべく、さらに働こうと決めた。インターネット上で働ける語学学校に登録し、日本語のレッスンをすることにしたのだ。想像以上にたくさんの生徒が押し寄せてきた。様々な国籍の様々な境遇の人々が、日本文化に興味を持ってくださっていた。彼らのために働くことは苦ではなかった。私のしたことで彼らの夢のお手伝いが出来るのなら、それは喜ばしいことだと思っていた。けれど友人はまたしても警告を発した。

「その学校のことをきちんと調べたの？給料はいくらなの？ちっぽけなお金をもらうために君が襤褸雑巾のように働いているとしか思えないんだけど」と。

私は彼の忠告を無視して働き続けた。おまけにその学校はある人からの紹介で知ったので、その人の顔に泥を塗りたくないという思いもあったのだ。ところがある日調べてみると、手数料が五十％以上引かれており、私は時給五ユーロ（約六五〇円）で働いているということが発覚したのだ。フランスの法律で最低賃金と定められている金額は手取りで時給八ユーロ（約一〇五〇円）。おまけに件の知人によると、私たち教師を教育しているチューターなる人物は月に六千ユーロ（約八十万円）も稼いでいるという。絵に描いたようなネズミ講である。さすがに馬鹿々々しくなり、学校を辞めることにした。

ここまで来るといくら呑気な私でも考えざるを得ない。なぜこのようなことが起こるのか。私の何がいけないのか。どうすればこの問題を解決できるのだろう。

クリストフ・ロカンクールという人がいる。二千年ころにフランス社会を騒がせた詐欺師である。ある日友人とふたりでインタビュー映像を観ていると、氏は次のように言った。

「本質的に正直な人間からお金を騙し取ることはできないものだ」

私はそれを聞いて憤慨した。

「何よそれ。私は一生懸命真面目に働いてきたのに。詐欺に遭う人間は不誠実な人間だとでも言うのかしら」

「だけど君は自分自身に対して正直じゃないだろう」友人がすかさず言った。

「せっかくフランスにいるのに奴隷みたいに働いて、小説を書きたいという夢だってほったらかしにして。時間をお金に換えることしか考えていないみたい。はたしてそれが自分に誠実であると言えるのかな」

これにはぐうの音も出なかった。友人はさらに続けた。

「それはぜんぶ君が引き寄せたことなんだよ。君が全身で訴えているんだ。『私のお金も時間も、大したものじゃありません。身を粉にして働きますから、どうぞお金を盗んでください』ってね」

「違うわ、そんなつもりで働いているんじゃない」私は反論した。
すると友人は顔を曇らせた。彼の瞳は冬の海のように暗く輝いていた。そしてこう言った。
「神様はね、君を最高傑作としてこの世に生み出したんだよ。僕らの一人ひとりが、そうなんだ。
ところが君は自分自身を敬わず、他人に奉仕することに人生の価値を見出そうとしている。それを見て神様はどう思うだろう。これらの出来事がなぜ起こると思う？それは君を不幸にさせるためじゃないよ。神様だってそんなに残酷じゃない。このメッセージの意味はこうだ。
『あなたの時間もお金もエネルギーも自分のために使いなさい。さもなくば砂のようにこぼれ落ちていくだろう』」

君がこのメッセージの意味を真に理解するとき、お金にまつわる問題は消えてゆくだろう」
友人はこう締めくくった。そしてにっこりと笑い、今夜は映画でも観ようかと言った。

窓の外には時を忘れたようなのっぺりとした灰色の空が見える。失われたものはいつか私の手に還ってくるのだろうか。季節は駆け足で冬に向かおうとしていた。

◆リヨン風信（三十三）◆

満月

中川莉羅

九月二十五日、友人アランの元同僚であるトマとマリーの結婚式に招待していただいた。彼らは愛犬のピノを連れて、家にも何度か遊びに来てくれたことがある。ご夫婦ともに温かく気さくなお人柄で、のびやかな知性と絶妙なユーモアのセンスを兼ね備えた人たちだ。

フランス人にとって、ユーモアは大事な要素である。会社の同僚で仕事のできない人がいると言っては笑い、政府の衛生対策について笑い、移民問題で社会が崩壊しそうだと言っては笑う。それは自己防衛と諧謔精神のごちゃまぜになったもので、笑うことでなんとか精神の均衡を保っていられるのだ。くしゃみをしてウィルスを追い払う躰の機能と似ている。

とにかく、そうしたわけで友人のアランと私は結婚式の行われるエピヌーズ県（Epinouze）を目指すことになった。当日の朝はからりと晴れて、気持ちのいい青空が広がっていた。気楽な恰好で来てねと言われてはいたものの、まさかパジャマ姿で乱入するわけにもいくまい。アランは藍色の地に金色のラインの入ったシャツにジーンズ、私はなけなしのお金をはたいて買った黒い花柄のワンピースにハイヒールという恰好で、リヨン行きのバスに乗る。おりしもそれは、ちょうど私のフランス滞在三年目に当たる日でもあった。

リヨンに到着すると、アランの従兄弟のグザビエ宅に直行する。グザビエはぱりっとした黒のスーツを着ていて、それが細身の躰によくフィットしている。コーヒーを飲みながらおしゃべりをするくらいの時間はあったが、そうのんびりしているわけにもいかない。グザビエの運転するレンタカーに乗せてもらい、一時間ほどかけて式場を目指す。道中、彼らの上司であるソフィアと、彼女の恋人のフレデリックをピックアップする。ソフィアはルーマニア出身の女性だ。黒のパンツスーツにきらきら光るラメ入りのシャツを着ており、ゆ

るやかにカールした暗褐色の髪と、濃いまつげに縁どられたひまわりのような瞳が美しい。

「グザビエったら、レンタカーなんて借りちゃって大丈夫？まさか運転を忘れちゃいないでしょうね」と、きゃらきゃら笑う。グザビエは微笑む。フレデリックはソフィアより少し年上のフランス人で、淡い水色の瞳をしたおだやかそうな人物である。彼は仕事の関係で何度か日本にも出張したことがあるそうで、寿司、お好み焼き、天ぷらなど日本食にも目がないと言う。そのような話をしていたら時間はあっというまに過ぎた。

我々はやがてコマンドリー・ド・ラシャル（Commanderie de Lachal）に到着した。テンプル騎士団聖堂に属する建物らしい。おそらく中世に建設されたと思われる、黄色っぽい石造りのそれほど大きくない建物で、礼拝堂、母屋、大聖堂、アトリエや農場などの共同スペースから成り立っている。

結婚式は中庭に設えられたステージで行われた。新郎新婦側のそれぞれの友人代表のスピーチがあり、それぞれのお父上のスピーチがあった（新郎側は、残念ながらお父様がいらっしゃれなかったので録音テープを聴かせていただいた）。学生時代のトマがどんな様子だったか、あるいは内気で恥ずかしがりやのマリーがいかにしてトマに心を開いていったか、など、それぞれの人がそれぞれの立場から新郎新婦について語った。ユーモアあり、涙ありの温かいスピーチだった。

そしていよいよトマとマリーのスピーチである。新郎は淡い水色の上品なスーツを着て、胸元に白い花を飾り、ひとの好い笑みを満面にたたえている。夜空にかかっている満月がそのままふわりと地上に降りてきたような、温かい微笑みだ。新郎は、ここにいるすべての人々と家族に感謝を捧げます、と言ってスピーチを締め

くくった。招待客全員が拍手をした。続いて新婦のマリーの番である。マリーはいつもかけている黒い眼鏡をしたまま、ブロンドの髪の毛をシニヨンにまとめ、肩の開いた美しい白いドレスを着ている。淡雪のような肌の色に白がよく映えている。彼女もまた幸せそうな笑みを浮かべてスピーチをした。スピーチが終わると、父親が彼女の元に駆けつけ、娘をしっかりと抱きしめた。彼女は少し涙ぐんでいるようだった。神父による結婚の誓いが言い渡され、新郎新婦はうやうやしく同意した。おふたりがどんなに周りの人から愛されているか伝わってくる、とてもいい式だった。

朝にはガラスのように晴れ渡っていた空が、午後から少しずつ曇り始めた。空は色を失ってのっぺりとしている。やがて小雨が降り出した。司会者の男性は時間を短縮して次の工程に移りましょうと言った。すると中庭の中央にたくさんの白い風船を手にした男性が現れた。招待客は立ち上がって、ひとりずつその風船を受け取る。ファレル・ウィリアムスの「ハッピー」が流れ出し、グザビエは音楽に合わせて小さなステップを踏んだ。司会者の男性が全員風船を受け取ったかどうか尋ねた。そしてアン・ドゥ・トロワの合図で、みな、一斉に風船から手を離した。つやつやしたくらげのような風船たちが秋の空を飾り、方々で歓声が上がった。なにか胸の奥がすきとおるような、不思議な心地がした。今日はとにかく、誰でも大歓迎。みんな踊って楽しく祝おう。これがフランス人のエスプリなのだと思った。

中庭でのアペリティフの後、我々は別室に招かれた。すっかり食事の席が整っており、招待客一人ひとりの名前を記した小さなカードがそれぞれの席に添えてある。結婚式の改ま

った雰囲気とはまたがらりと変わり、今度は打って変わって会場は陽気なムードに包まれた。新郎新婦の若かりし頃の暴露話あり、口笛を鳴らして囃し立てる声あり。フランスの結婚式では、みんな飲んで騒いで朝まで踊るのだという噂は聞いていたが、まさかそれが本当の話だとは思っていなかった。しかも、優雅なワルツか何かを踊るのだろうと思っていたら、なんとギンギンのロックがかかって、人々は食事中だというのに席を立って踊りだしたのだった。

残念ながら前日から体調を崩していたアランと私は最後までそこにいることが出来ず、失礼ながら式が終わるまで車の中で休んでいたので、パーティーがどのように終わったのかを見届けることは出来なかった。しかし降り始めた豪雨と落雷の光がきらめく中に、人々の笑い声が深夜一時過ぎまで響いていたのが聞こえた。ずぶ濡れになったソフィアとフレデリック、そしてグザビエがリズミカルに車の窓を叩く音で我々は目を覚ました。

「ああ、ごめんなさい、すっかり寝てしまって。式はどうだった？」と私は尋ねた。

「とっても楽しかったよ！君たちも最後まで残ればよかったのに。残念だったな」とグザビエが言った。

「ああ、トマとマリーに申し訳ないことをしちゃったなぁ。今度は彼らをうちに招いてパーティーでもしないか。僕らだけで気楽にやろう」とアラン。もちろん、反対する者はいなかった。

そして車は走り出した。陽気なパーティーの名残とほんの少しの疲れを躰にしみ込ませた我々を乗せて。雨はすっかり上がっており、黄金色の満月があたりを煌々と照らしていた。今度あのふたりに会ったら、もっとたくさんの話をしよう。そう思いながら、私は目を閉じた。

（後記：本稿に出てきた登場人物はすべて実在の人物ですが、ご本人の許可を得てすべて匿名で書かせていただきました）

◆リヨン風信（三十二）◆

黄昏

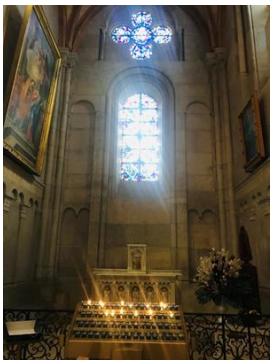
中川莉羅

躰を凍らせるような雨が降るかと思えば、翌日には三十度を越す陽気。今年の夏は気まぐれだ。それは政策を決めかねて右往左往するフランス政府の対応を反映しているかのようだ。

二〇二一年八月九日、フランスではついに衛生パス（pass sanitaire）が導入される運びとなった。国民へのワクチン接種は完全に義務化されることになる。これに反対するフランス市民は全国でデモンストレーションを行っている。その人数総勢約三七〇万人。政府によると、フランス史上最大規模とのことである。私たちは間違いなく歴史に残る日々を生きている。

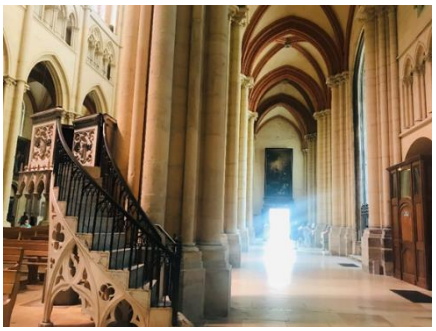
ある暑い夏の日、友人のアランと私は、彼の従兄弟のグザビエを訪ねてリヨンへ足を運んだ。タラールからリヨンへバスに揺られること約一時間。さらにバスを乗り継ぎ、まっすぐに旧市街（Vieux Lyon）を目指す。中世の魔法使いでも住んでいそうな石畳の街。青空を背景にくっきりと聳え立つ大聖堂。いつもと変わらぬリヨンの風景が私たちを出迎えてくれる。

グザビエは午後二時過ぎに待ち合わせ場所に現れた。ヘッドフォンにサングラス、Tシャツに短パンというラフな身なりである（ミュージシャンである彼は、ヘッドフォンをいついかなる場所でも着用している）。通常ならば、メンツがそろったところでバーに行こうかという流れになるのだが、今回はそうもいかない。前述の衛生パスのためである。レストランやカフェのテラス席は観光客らしき人々で溢れているが、彼らに言わせる



と、例年に比べてフランス人顧客の数は激減したそうだ。政府への反対意見を表明するため、自主的に一時閉鎖する店もある。

私たちは広場のベンチに座ってひとしきり近況報告や雑談をした後、グザビエの家に向かった。近所のスーパーで買い物を済ませ、汗まみれになりながら、彼のアパートを目指す。道すがら、暑さのために集中力を失っていた私は、赤信号にも関わらず道を横断してしまった。それを見ていたグザビエがからかう。



「リラ、僕はちゃんと見てたよ。携帯で写真を撮って、インターネットに載せちゃうぞ」

「だってフランス人はいつもそうしているじゃないの。ちょっと真似してみたのよ」と私。

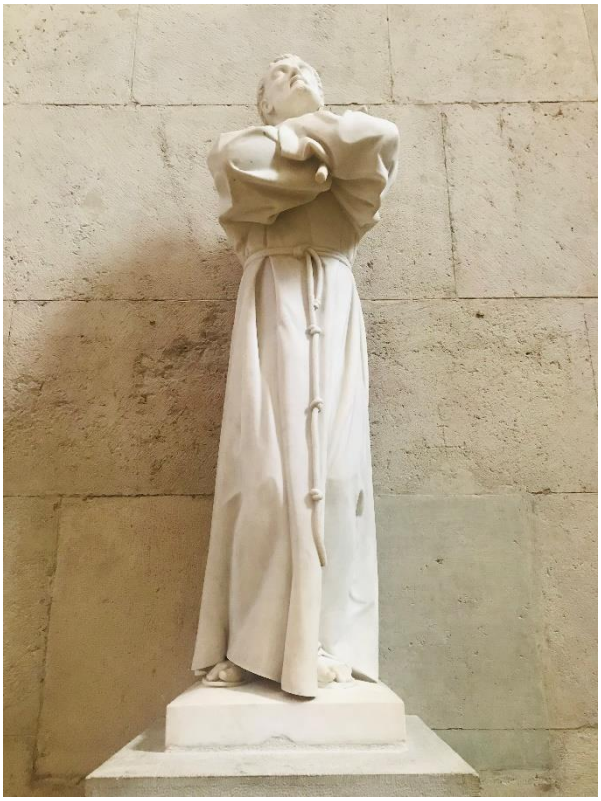
「その通り。フランスのことが分かってきたみたいだね」

「まあね。それにしても、フランス人ってもっとエレガントで知的で、品行方正な人たちだと思っていたわ」

「僕たちはエレガントで知的な国民だよ。そして同時に、大いなる不平屋でもある。見てごらん、ほら、彼は優雅にクラクションを鳴らしているでしょう？」

グザビエは笑いながら目の前の車を指す。ちょうど運転手がすごい勢いで通行人に罵声を浴びせているところだった。それで私たちはくすくすと笑った。

グザビエの住んでいるのは、一九六〇年代のアメリカを思わせるようなシックなアパートである。きちんと片づけられた白い部屋に、ベージュ色のテーブルとソファが行儀よく並び、壁にはアンディー・ウォーホルのポスターが貼られている。心地よいジャズピアノの音がゆっくりと空間を満たす。



みな暑さのために疲れ果てていたので、午睡の後、十九時三十分頃に食前酒と軽食を始めた。

アランとグザビエは従弟というだけではなく、何か目に見えない絆で繋がれているようなところがある。勝ち気で血気盛んなアランと、寡黙で紳士的なグザビエは一見すると正反対のタイプだが、二人の関係は苦境を共にした戦友といった趣だ。知性の働きが鋭く、感受性の豊かな二人は、アーティストとしても好みが合うようだ。映画や音楽、政治批判、フランス社会の行く末などを私たちは気の向くままに語り合った。胸の内をさらけ出せる誰かがいるというのはいいものだ。星のない真っ暗な夜に聴くピアノのように、ほんの少しだけ孤独を甘くしてくれる。

翌朝もからりと晴れていた。私たちはレースに出遅れたモグラのようにもそもぞと昼過ぎに起き出し、ひとしきり話した後、夕方暇を告げた。タラールへの帰りのバスの中で、疲れ果てたアランは目

を閉じた。ところが、その日のバスは眠るのに適した場所ではなかった。西日の射し込む車内には冷房が効いておらず、乗客たちはべったりと肌に張り付く暑さに不平を漏らしていた。五、六人のアラブ系の人々が抗議をし始めた。彼らは暑さのために気が立っているのか、「冷房をつけろ」と運転手に向かって荒々しく叫び、席を立って窓を開け始めた。それでも一向に車内は涼しくならない。白髪の運転手は席を離れ、ゆっくりと乗客席に向かって歩いてきた。そして先程の乗客たちに向かって、

「窓を開けたのはあんたたちかい？さっき冷房を入れたんだがね。窓を閉めてくれなきゃ、せっかくの涼しい風が逃げちまうよ」

と静かに語りかけた。アラブ系の人々はぷりぷりしながら、今度は乱暴にドアを閉め始めた。

「こんなバスまっぴらだ！俺たちは料金を払ってるんだぜ。ちゃんとしたサービスを受けたいもんだな」となおも激しい剣幕で言い募る彼らに向かって、

「それなら、自転車に乗ったらよかろう」

運転手は淡々と言い、静かな足取りで運転席へ戻っていった。そしてバスが発車して数分もすると、何のことはない、涼しい風が車内に流れ始めたのであった。

車内の緊迫した空気に怯えていた私に、アランは

「心配するなって。とにかく早くバスから降りて、家に帰ってゆっくり眠ろう」と言った。

帰宅すると友人は言った。

「君はたぶん慣れていないだろうけれど、こんなことはフランスでは日常茶飯事なんだ。もっとひどい事件だってたくさんある。エディット・ピアフの時代の古き良きフランスはもう幻なんだよ」と。

「僕が大統領だったら、ナポレオンみたいにこの国に栄光を取り戻してみせるんだがなぁ。残念ながら、僕は政治家ではなく、アーティストだ。だから日々、美しいイラストをせっせと描くのさ。より良い世界のためにね」

フランスを含む西ヨーロッパでの移民問題が年々深刻化していることは知っていた。けれど「移民」とはどのような人々なのか、具体的にどのような問題があるのか、知っているようで知らなかったように思う。私自身が外国人なのに、移民問題について論じる権利などあるのか、という思いもあった。この国に来てもうすぐ三年が経とうとしているが、今のところ「移民」と呼ばれる人々に何か嫌な思いをさせられたということは、ない。そして彼らのすべてが危険で野蛮な人たちとも思わない。今回のことにせよ、「事件」と呼べるほど大げさなものではなかった。しかし、生温い空気の中で育った私にとって、彼らの声に含まれた暴力的なエネルギーや言い知れぬ憎悪を感じたことはややショックであった。なお、念のため注釈を加えておくと、私は人種差別的な発言をするつもりは毛頭ないし、この寄稿は政治的意図とは無関係である。

「エレガントな不平屋」たちは、移民問題、コロナウィルス、衛生パス等様々な問題に対してどのように対処するのだろう。仕方ないねと、肩をすくめてちいさくため息をつくのか。それともフランス革命時のように、自由・平等・博愛の名のもとに頑として闘い抜くのか。

おりしも窓の外では淡い夕闇が訪れようとしていた。太陽は最後の力をふり絞るように、きらきらと輝きながら消えてゆく。黄昏はこの街をゆっくりと包み込む。しかし太陽は明日になればまた昇るだろう。力強く凱歌を唱えながら。

◆リヨン風信（三十一）◆

無限

中川莉羅

フランスにも梅雨はあったかと思うほど、雨の日が続く。けれど雨降りの翌日にはさらりとした風が吹き、すがすがしく晴れ渡った青空が見える。学生達の多くは、六月半ばからすでにバカンスに突入しているようだ。新学期はこちらでは九月なので、それまでの約三か月間に渡る長いバカンスの始まりである。つかのまの晴れ間を少しでも満喫しようと連れ立って出かける若者たちの姿があちこちで見られるようになった。

そのような折、マクロン大統領が十一日夜コロナウィルス対策に関する声明発表を行った。それによると、医療従事者にはワクチンの接種が義務付けられるということ、そしてそれ以外の一般市民にも衛生パスポート（pass sanitaire）の制度が取り入れられるとのことであった。衛生パスポートとはワクチン接種の証明書のことで、その適用範囲は徐々に拡大される見込みである。具体的には、七月二十一日以降、映画館などの娯楽施設では十二歳以上の者に対しパスポートの提示が求められる。さらに八月上旬以降には、カフェ、レストラン、大型商業施設、医療施設、公共交通機関においてもパスポートの提示が必要となる。この政策にフランス市民は強い反感を示しており、十七日にはワクチン接種義務化に反対する大規模なデモンストレーションがフランス全土で行われた。現場に居合わせなくとも、その迫力はパソコンの画面の向こうからも伝わってくる。「自由を！自由を！(Liberté ! Liberté !)」の掛け声と共に群衆が大きなうねりとなって街中を練り歩く。フランス革命以来、生きる権利を求めて闘い続けてきたフランス市民の反骨精神を垣間見た瞬間であった。

まだまだ楽観の許されない状況が続くとはいえ、毎日そればかりを考えて過ごすわけにもいかない。昨年度の今頃はビザ申請のために駆けずり回っていたが、ありがたいことに三年間の学生ビザを取得することが出来たので、二〇二三年までその心配はない。この国で生き残るためにどうすべきか、何ができるのか、何がしたいのか、といった根本的な問題に改めて向き合うこととなった。

「バカンスでも取ってゆっくりすればいいのに」という友人の助言にも関わらず、貧乏性な私はじっとしていられず、

仕事を求めてあちこちの門戸を叩いた。とはいえ、このご時世なので仕事はオンラインで出来ることに限られている。ありがたいことに、短期の通訳の仕事やオンラインレッスンが増えてきた。レッスンはすべてインターネットを通じて行われるため、物理的には一歩も家から移動していないのだが、パソコンの画面の向こうに様々な国籍や職業の人々が入れ替わり立ち代わり現れる。漫画やアニメの影響で日本語に興味を持ったというフランス人の生徒さん、日仏ハーフの舞台女優さん、はたまた遥々アフリカからレッスンを受講してくれる学生さんもいる。日本文化がこんなにも様々な人々の関心を集めているのかと思うと、嬉しいやら面映ゆいやら、不思議な気持ちがする。インターネット上とはいえ、毎日見知らぬ異国の人々に出逢い、子どものころに好きだった漫画やアニメの話をし、まるで旧知の仲のように笑い合うなんて、ほんの少し前の私にとっては信じがたいことだっただろう。

こうして昨日と今日と明日が、毎日押し寄せるたくさんの人々の名前と書類の作成と翻訳の単語の向こうに消えてゆく。読みかけの本も書きかけの小説も、キャンディの包み紙のように方々に散らばったままだ。

先日、友人と『リミットレス』というアメリカ映画を観た。二〇一一年公開のニール・バーガー監督作品である。主人公はニューヨークに住む売れない作家のエディ・モーラ。自堕落な生活を続けていた彼は、恋人のリンディに別れを告げられてしまう。そんなある日、彼はヴァーノンという売人に偶然出会い、「NZT-48」というスマートドラッグを手に入れる。それは、一般的に二十パーセントしか使われていないと言われている人間の脳を百パーセント活用させる新薬だった。エディが薬を飲むと、効き目は想像以上であった。長い間煮詰まっていた小説の執筆を一晩で終えたばかりか、最新の株価の動きを十日で学んで巨額の富を稼ぎ、一気に大富豪の仲間入りをする。ビジネスをバリバリとこなし、週末には著名人とのパーティー、クルージング、ナイトクラブという生活。そのころには、彼は薬なしではいられなくなっていた。しかし薬にはおそるべき副作用があった。激しい頭痛、記憶喪失、筋肉の摩耗や抜け毛といった症状、そしてある日肉体が限界を迎える。おまけに、彼は薬を付け狙う犯罪者から追われる羽目になる。こうして彼は否応なく闇の世界に巻き込まれてゆく…。

人間である私達は、気力や肉体の限界と常に闘わなければならない。毎日二十四時間がどの人間にも平等に与えられているとはいえ、能力は人それぞれ違うし、同じ人間でも常に最高のパフォーマンスを維持出来るわけではない。イラストレーターの友人は冗談交じりによくこう言う。

「僕の分身が十人いればいいのにな。そうしたら、デッサンをする僕の傍らでスーパーマーケットに買い物に行く僕がいて、腕が疲れたらマッサージをしてくれる僕がいて、ファンレターに返事をする僕がいて、君と一緒に映画を観る僕がいて…。ねえ、それって最高だと思わない？」

その構図を想像すると思わず笑いがこみ上げてきた。大きな躰をした彼らがちょこまかと動き回り、それぞれ与えられた仕事をせっせとこなすのだ。「一流のアーティストというのは、作品を人任せにしてはいけない。何もかもを自分でプロデュースしなければならないのだ」と日頃から主張している彼は、生活全般においてもそのルールを徹底させたいらしい。

では、私はどうだろうか。仮に私の分身が十人いたとしたら、果たして「莉羅A」や「莉羅B」は平和的に協力し合えるのだろうか。「お前は怠惰だ。なぜもっと頑張らないのだ」と叱咤する莉羅Aと、「だって疲れているんだもの。お菓子を食べてリラックスしたいわ」と口答えする莉羅B、さらには「そもそも何のために生きているのか」と存在論をふっかける莉羅Cなど、様々な人格がぶつかり合い、まともな仕事など出来そうもない。

おそらく人は誰もが、自分の中の幾つもの「私」をなだめすかし、時には闘い、時には励ましながら生きているのではないだろうか。しかし、押しつぶされた「私」は、決して消えてしまったわけではない。深夜ひとりで聴く音楽の中に、偶然見かけた小説の一節の中に、街で見かけた看板の中にふと現れて訴えかける。「私はここだよ」と。時間の中で置いてきぼりにされた小さな私が、今もどこかで泣いている。いつかその「私」と手を取り合って進んでゆける日が来るのだろうか。エネルギーに満ちあふれて、何も恐れるものはないのだと、意気揚々と夢に向かってゆけるのだろうか。蜜蠟で固めた鳥の羽で太陽を目指したイカロスのように、おろかな試みだとしても。

仕事の合間に教会に行き、祈る。夢遊病者の戯言のように絶え間なく頭の中に流れていた雑音が、しんと静まる。競技場の裏を流れる川のせせらぎ。白い炎のような光。人間の世界がどうであろうと、空はまだまだ青く、宇宙は無限に広がっている。いつかこの世界にも平和が戻ってくるように、切に願う。